



地域人材育成研究

3

特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介
奥尻高校の町立移管と高校魅力化（上）

編集・発行：地域人材育成研究会



北海道奥尻高等学校





『地域人材育成研究』第3号の位置づけと使用について

『地域人材育成研究』第3号は、町立移管して地域と高校との協働によって、高校づくりと地域づくりを行っている北海道奥尻高校と奥尻町を特集します。

奥尻高校で見聞きした考え方、しくみ、悩み、思いは細部に至るまでが目から鱗が落ちるものでした。そして教育の持つ温かさを思い出させるものでした。本報告書は中学生と保護者の皆様には奥尻高校やその他の高校魅力化を行う高校を受験する参考資料として利用していただけると幸いです。行政と高校、地域の皆様には、高校魅力化推進の参考資料として利用していただけると幸いです。

『地域人材育成研究』の研究上の位置づけは、地域人材育成研究会が行った調査のデータを速やかに公開しアーカイブ化することを目的としています。研究者の皆様には、研究の資料として利用していただき、また、ご意見をいただけると幸いです。私たちは今後、本号の内容をもとに研究を進め、成果を公表する予定です。

最後になりましたが、『地域人材育成研究』の著作権の全ては本研究会に帰属します。ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を、印刷物か電子データかの形式を問わず、複製や改変や再配布することができます。本誌をみなさんでご活用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、北海道奥尻高校と奥尻町、奥尻町観光協会の許可を得ることを条件といたします。本誌に使用されている写真は、奥尻高校及び奥尻町、奥尻町観光協会から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。



地域人材育成研究 第3号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

青山学院大学 樋田大二郎

6 まなびじまの町立高校・奥尻高校の町立移管と高校魅力化

—— 地域主義的転回と地域学校協働の交点で起きていること ——

14 報告① 町立に移管した高校に着任して考えた課題と方針

—— 全国募集と地域との協働 ——

34 報告② 町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

(1) 経緯、教員集団の変容と教師の成長

44 報告③ 町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

(2) プログラムの意図と開発過程 内容

59 報告④ 町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

(3) 奥尻高校の根底にある考え方

69 報告⑤ 生徒は奥尻島の町立の高校魅力化で夢を実現することを選んだ

102 町立移管が示した高校教育の地域主義的転回

—— 奥尻高校の実践から見える高校魅力化の意義 ——

※以下 『地域人材育成』第4号に掲載(予定)

特集 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(下)

町立への移管と地域高校協働の深化

報告⑥ 町立への移管の実際と町・住民の奥尻高校への想い

報告⑦ 町の課題に基づいた高校魅力化との協働

報告⑧ 教育的配慮をしながら町立高校を支援

報告⑨ 島の観光産業の変化と島唯一の高校

報告⑩ 東京でカフェ巡りの生活をして奥尻でカフェを開店



北海道奥尻高等学校

〒043-1402

北海道奥尻郡奥尻町字赤石 411-2

地域人材育成研究 第3号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（上）

青山学院大学 樋田大二郎

訪問調査は二〇一九年九月一日～四日の四日に青山学院大学教授・樋田大二郎が行った。インタビュー対象者と場所は後述の通り。インタビュー内容はあらかじめ大項目を設定した半構造化されたインタビューであった。

本研究は多様な人にインタビュー調査を行ったが、その理由は、地域では、地域の多様な要素が複雑に関係しており、一部を取り出して考察すること、地域の生態系の一部を取り出して地域を語ったり、地域の処方箋を書いたりすることは適切ではないと考えられるからである。

『地域人材育成研究』第3号

奥尻高校 清水信彦校長

二〇一九年九月二日、於・校長室

奥尻高校 井上壮紀教頭、松原聡史教諭、清水信彦校長

二〇一九年九月二日、於・校長室

奥尻高校生徒 北野宏志(仮名)、海野友美(仮名)

二〇一九年九月二日、於・奥尻高校図書館

『地域人材育成研究』第4号(予定)

奥尻町教育委員会 桜花幸久事務局長

二〇一九年九月三日、於・奥尻町教育委員会

奥尻役場水産農林課 満島章課長、横田稔主幹

二〇一九年九月三日、於・奥尻町役場

奥尻役場地域政策課 幅口一路主幹、羽立仁主幹

二〇一九年九月三日、於・奥尻町役場

奥尻島観光協会 井口和弘事務局長

二〇一九年九月四日、於・奥尻島観光協会

カフェ・ファアロ 禿あゆみ氏

二〇一九年九月三日、於・カフェ・ファアロ

調査概要

※インタビューは地域人材育成研究会代表・樋田大二郎(青山学院大学)が行い、テープおこし後にインタビュー対象者に本誌に収録する内容の確認および加筆訂正を行っていただき、さらに樋田が整理を行いコメントを付した。

※個人情報保護等の観点から、名称・地名等について、一部加工して掲載した。

※お忙しい中、インタビューにご協力いただいたみなさまに感謝いたします。

まなびじまの町立高校・奥尻高校の町立移管と高校魅力化

——地域主義的転回と地域学校協働の交点で起きていること——

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域主義的転回、町立移管、奥尻高等学校、地域学校協働、内発的

1 高度経済成長後社会の地域主義

「この島でしかできないことをしたい」、「何か普通じゃない体験がしたくてここに来ることにしました」これらの言葉は、最近、高校魅力化を行う高校に全国募集で入学した生徒の言葉である。高校生らしからぬ言葉であり、高校教育が変わる予感がする。

考察を進める前に、まずは五〇年前の若者をふりかえろう。一九七〇年代の若者はオートバイやヒッチハイク、そして国鉄（現JR）の周遊券を手に地方を旅した。東京オリンピックを経て大阪万博が行われた直後の一九七〇年一〇月に、国鉄のディスカバージャパンのキャンペーンが始まった。キャンペーンは国鉄が提供し、永六輔さんがルポする旅番組『遠くへ行きたい』とともに大ヒットした。『遠くへ行きた

い』の山口百恵が歌う主題歌には「巡り逢いたい」というフレーズが繰り返されたり、キャンペーンを企画した電通の藤岡和賀夫氏は同じ年に富士ゼロックスのキャンペーン「モーレッツからビューティフルへ」の企画も担当していることから、ディスカバージャパンは、高度経済成長を達成した日本が物質世界の充実から精神世界の充実へとステージを進めたことを象徴していると考えられている。ディスカバージャパンは日本と自分自身を再発見する企画であり、地方への旅を通して地域の暮らしを大切にすること、地域での人々の支え合いを大切にすることを思い出させるものだった。

若者を離れて当時の産業と社会を見ると、一九七〇年代半ばに、日本で初めて地域主義を唱えた経済学者のひとりである玉野井芳郎は経済合理的な人間像への疑問を訴え、産業主義から地域主義への転換を

主張した。同じ頃、E・F・シューマッハーが『スモールイズビューティフル』で大量消費や巨大科学振興を批判し、小規模な産業や中間技術(適正技術)の意義を説いた。

玉野井は経済学分野以外の研究者にも意欲的に働きかけ、研究は多様な分野の研究者に引き継がれた。しかし、学歴主義が根強い教育分野に限っては玉野井が期待を寄せていたほどには地域主義は広まりを見せなかった。

2 教育の地域主義的転回と高校魅力化

最近になって、一部の学校が地域社会からの要請を積極的に受入れ始め、「地域の特色を生かした教育」、「社会に開かれた教育課程」、「地域学校協働」、「地域コンソーシアム」など、地域のニーズや地域の教育力と協働するようになり、これに合わせて、徐々に教育の地域主義の動向が現れるようになった。われわれはこの動向を教育の地域主義的転回と呼ぶこととする。

私たち「地域人材育成研究会」は、高校魅力化型の高校改革を対象に、量的データと質的データを収集・分析し、文科省や総務省の政策および地元産業と社会からの要請がこれまで地域主義から距離を置いてきた高校教育をどのように変容させたかを考察してきた。『地域人材育成研究』は、収集した教育の地域主義的転回のデータをアーカイブすることが創刊当初の動機であった。

研究を始めてみると、高校魅力化は多様だし定義は曖昧であった。ここで高校魅力化型の改革の共通項を探すならば、なによりもまず文

字通り生徒が魅力を感じる高校を創ることを目標にしている。そして、それを実現する方法としての、県外生募集、高校連携型の公設学習塾の設置があり、さらに地域の特色を生かした教育、地域との協働、コーディネーター(地域学校協働活動推進員)の導入、地域コンソーシアムの設置などがあげられる。高校魅力化はこのように、「魅力」と「地域」がキーワードとなる改革である。

ディスカバージャパンに遅れることおよそ四〇年、二〇一一年開始の「島根県離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」の第一ステージに参加したのは原八校であった。

原八校は統廃合の危機に瀕していた。

従来の学歴主義的な高校教育にもとづいた教育改革では生徒は集まらなかつたし、在校生の不登校や中退も起きていた。キャリア教育も空回りしがちであった。いずれの高校も学歴主義から脱却した高校教育の開発が喫緊の課題であった。

島根県の高校魅力化では、都市の高校が行うことが多い受験教育やグローバルイズムの教育の追求の中で見失われてきた地域の様々な価値を、魅力の要素とすることとなった。

地元出身の生徒と県外生の両者にとって魅力的でわかりやすい地方地域での高校生活、地域課題への問題意識にもとづいた内発的動機づけ、自己決定感に基づく押しつけない学習の動機づけ、郷土愛の深化、地域貢献意識や地域当事者意識の育成、地域課題解決型学習、将来のUターン準備教育、地域学校協働など、従来の受験体制下とは異なる取り組みが次々と開発された。

しかし、高校魅力化は定義や概念が明確でないだけでなく取り組みは多様である。隠岐島前高校を始めとした島根型の高校魅力化はあくまでも島根県の離島・中山間地域の事情を反映した改革である。

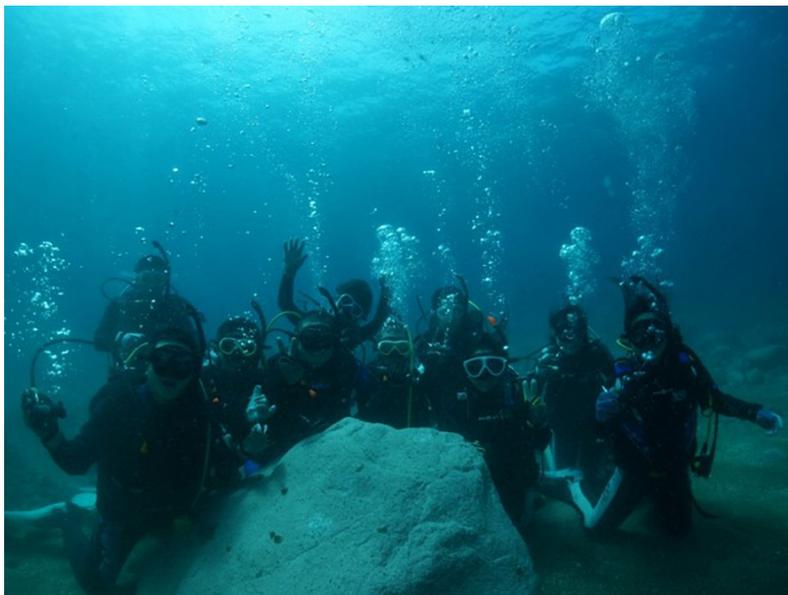
同じ島根県内でも地域の事情や高校の背景ごとに、改革の様相は異なっている。たとえば、島根県西部の隣接する津和野町と吉賀町では、高校魅力化の改革の様相は異なっている。

津和野高校は津和野町の城下町としての歴史やディスカバージャパンの頃の遺産で商人が多いという特徴や資源を生かした改革を行い、吉賀高校は吉賀町の有機農業と農業文化を背景とする特徴や資源を生かした改革を行っている。

今、高校教育や学校教育をめぐることは、様々な用語や原理が飛び交っている。「主体的、対話的で深い学び」「社会に開かれた教育課程」「チーム学校」、「地域学校協働」、「地域コンソーシアム」、「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」などである。いずれも重要な用語であるし、重要な原理である。

しかし、これらいわゆる上からの原理とは別の原理で、目の前の生徒や地域に向かい合いながら、教育改革に取り組んでいる高校がある。島根県の魅力化の高校やその他の意欲的な高校、そして今回訪問聞き取り調査を行った北海道奥尻高校は、内発的な性格の強い高校魅力化改革となっている。

3 北海道立奥尻高等学校から 町立の北海道奥尻高等学校へ



北海道奥尻高校は、奥尻島が農業と漁業と観光の島であること、後述する島チカラを持つていること、地元の官民を挙げた支援を受けていること、道立から町立に移管したこと、コーディネーターを配置していないこと、一学年一クラスが定員であること、(島根県の高校魅力化の原八校ですら四〇名定員の小規模校は吉賀高校の1校のみ)、複数の大学から支援を受けていること、などの特徴がある。

地域人材育成研究会は実践されている取り組みの素晴らしさはもちろんだが、それに加えて右に述べた特徴を考えて、今後の魅力化型高校改革のモデルになりうると考え、奥尻高校への訪問インタビューを行った。

奥尻高校の地域の特徴を生かした教育の一つ一つ、地域学校協働の取り組みの一つ一つ、そして全体としての教育観や高校教育改革観、地域と高校との連携の在り方、奥尻町の教育政策、教師間の関係の作り方、これらのいずれもが課題の多い地域で地域の課題に向かい合った取り組みであり、時代を先取りし他校のモデルとなり得るものである。また、日本の高校教育改革の方向を考えるモデルにもなり得るものである。

4 奥尻島

奥尻高校は北海道の南西部の奥尻島の丘の上に位置する。

奥尻島は日本海に浮かぶ自然豊かな島で、海は透明度が高く「奥尻ブルー」の海である。九月上旬に訪問したとき、高校への坂道からは奥尻ブルーと北国の澄んだ青空が交わって遠い果てまで輝いていた。

高校生は、奥尻ブルーの海でスクーバダイビング(スキューバダイビング)の授業を受けることができる。

奥尻島へは空路なら函館空港から奥尻空港まで三〇分、フェリーなら江差港から奥尻港まで二時間半の距離であり、面積は一万四二九九^{km}₂、周囲約八四^{km}。人口は昭和三五年の七九〇八人をピークに減少して、平成三〇年六月一日現在で二四五七人である。

奥尻島は、過去に大きな災害を経験している。平成五年七月二日午後一〇時一七分に発生した北海道南西沖地震である。島内各地区で建物の倒壊、地割れ、陥没、崖くずれが発生した。さらに、地震発生直後に津波の第一波が押し寄せ、津波の最高到達高は三〇m近くであったとされている。

島民は復興に努め、平成一〇年三月には完全復興を宣言するに至っている。「島チカラ」のなせる技だと考えられている。

5 奥尻高校の沿革

奥尻高校は、昭和五〇年(一九七五年)四月に一学年二学級の北海道江差高等学校奥尻分校として開校。その二年後の昭和五二年(一九七七年)に北海道奥尻高等学校となる。平成一四年には一学年一学級になった。

平成二八年(二〇一六年)に道立から町立に移管し、北海道奥尻高等学校となった。翌平成二九年(二〇一七年)からは全国募集を開始している(所在地域である檜山学区以外の上限は入学生の五〇%以内)。



町立移管の主たる目的は廃校化の回避であり、廃校化の危機に振り回されない高校教育の確立であった（町教委）。町立移管によって、それまで町から離れた「丘の上の」奥尻高校が町との距離を一気に縮めたとされる（高校教員）。

募集人員は、全日制課程普通科四〇名である。平成三二年度（二〇一九年度）の入学生徒数は三二名、うち、島内が一六名、島外が一五名であった。卒業後の進路状況は、平成二八年度は一四名中一〇名が進学、四名が就職。平成二九年度は一七名中一二名が進学、五名が就職。平成三〇年度は九名中七名が進学、二名が就職であった。

6 地域学校協働と特色のある教育

奥尻高校では、生徒が島民と協働で地域活性化に取り組み、生徒は地方創生を体験的・実践的に学んでいる。ここでは概略を記述し、詳細は本号収録の「報告③町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと（二）プログラムの意図と開発過程、内容」で紹介する。

奥尻高校は総合的な学習（総合的な探究）の時間を使って、以下の三つの取り組みを行っている。地方創生を高校生の目線で考えて探究する町おこしワークショップ、高校生が地域の課題と解決策をアピールする奥尻パブリシテイ、奥尻の魅力を再認識し環境保全を考え発信・表現するスクーバダイビングである。生徒は奥尻パブリシテイとスクーバダイビングのうち、いずれか一つを選択する。

町おこしワークショップ

テーマが年度ごとに変化するが、奥尻高校は昨年度と同じであることは後退であると考え（清水校長）。二〇一九年度は前年度から引き続き「観光」、「祭」、「海産物」、「農産物」、「自然エネルギー」、「防災」の六分野に関する町の専門家を招き地元産業の現状と課題を提示してもらい、生徒が解決策を考え提案する。さらに、新規テーマの開拓に挑戦している班もある。町の専門家は町役場の地域政策課を紹介を依頼する。生徒は、町の課題・解決策についてワークショップ形式で討議し、分析・整理した内容を町民に対してプレゼンする。協力する町民は、教員から電話があると随時、支援をしてくれるという。プレゼンを聞いた町の専門家同士が自分のグループの発表は良かったと自慢しあうという。

奥尻パブリシティ本部

毎年、活動は深化する。二〇一九年度の「奥尻パブリシティ本部」は、企画、web・リサーチ、ハンドアウト、広報の四つのチームに分かれて、島の課題に対して企画を立案し、町に施策提言を行うことを目標として活動を進めている。

スクーバダイビング

震災からの復興の中で高校生の海への親しみを回復することを目的に始まったが、町立に移管後、地元の潜水器漁業者がインストラクターを積極的にかつて出ている。今では、奥尻高校の魅力の柱の一つに育っている。

7 地域学校協働と特色のある部活動

奥尻高校の部活動には地域学校協働を行う二つの部活動がある。オクシリイノベーション事業部(Okushiri Innovation Division(以下OIID))とボランティア局である。

OIID

部活動遠征費を集めるためのクラウドファンディングを行ったことから始まった部活動で、その後、Tシャツ販売や地酒のラベル作成など様々なことをして部活動遠征費を生み出している。

ボランティア局

町民スキー大会と奥尻ムーンライトマラソンのボランティアスタッフとしての参加、各種募金活動、小学生の通学合宿「子どもナイト☆ミーティング」のサポートスタッフとしての参加、奥尻町総合文化祭でのチャリティ販売や募金活動など、地域での活動は多岐にわたっている。

※奥尻高校の取り組みは年々発展しているので、入学を考えている中学生と保護者のみなさんは令和二年度以降の取り組みについては直接問い合わせるか、ホームページ等の資料で確認していただきたい。

8 まなびじま奥尻プロジェクト

Okushiri English Saloon

奥尻にいなから留学気分を味わう。英語が話せるようになる。対象は、

中学生・高校生・社会人。さまざまな話題について、自分の感想や考えなどを英語で話し合う。

二週間に一回の割合で、島の各所を巡回して実施。対象は、中学生、高校生、社会人で、希望する中学生、高校生には、終了後、補足の説明や英語学習の相談を受け付ける。

数学寺子屋

数学の“補習”。ただし、考え方を中心に学び、数学の面白さを知って貰う。

Wifi二二ネー

ボランティア参加の都市の大学生の兄さん姉さん(二二ネー)とネットで交流する。大学受験に向けての勉強の仕方や、不安などを聞いてもらう。その中で、大学での生活の話も聞ける。さらに、大学生の視点をかりて奥尻高校での生活を考える。

町おこしワークショップ

前述の町おこしワークショップは、島民との協働で行われており、まなびじま奥尻プロジェクトの柱の一つに位置づけられている。支援している町役場の職員はインタビュウの中でただ頼まれ仕事をしているだけでなく、どのくらい教えたらいのか、生徒の主体性をどのように考えたらいのかと教育の視点から生徒への接し方を考えていることが印象的である。

最後になったが、私たちの広い意味での研究仲間であり、多くの刺激をいただいている個人と研究グループの研究を紹介したい。一つは、

地方の高校における進路指導に於いて、大学進学は地域の人材を作ることすなわち将来のUターンが意識されていることを示した研究である(上地二〇一九)。もう一つは、北海道大学のグループによる研究であり、教育行政学の関心から奥尻高校を何度も訪問して町立移管の過程を詳細に分析し、道による支援と高校の自律との新しい関係性が期待できることを明らかにしている研究である(篠原・高嶋・大沼二〇一九、高嶋ほか二〇一九など)。

〈引用・参考文献〉

- 遠藤尚秀、二〇一八、「わが国における地域経営論の萌芽—公共経営論の深化と地方分権改革—」『福知山公立大学研究紀要』(一)、五一—八七頁。
- 樋田大二郎・樋田有一郎、二〇一八、「人口減少社会と高校魅力化プロジェクト—地域人材育成の教育社会学—」明石書店。
- 樋田大二郎、二〇二〇、「地域活性化と連動している大三島分校の高校魅力化(特集 各地の高校魅力化プロジェクト)」『地域人材育成研究』(二)、三四—三七頁。
- 樋田有一郎、二〇二〇、「愛媛県立三崎高等学校せんた九部生徒インタビュー(特集 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介)」『地域人材育成研究』(一)、六一—七三頁。
- 上地香杜、二〇一九、「地方からの大学進学における日常的な進路指導—教師と生徒の認識に着目して—」『日本高校教育学会年報』(二二六)、七一—八一頁
- Schumacher,E.F.・小島慶三・酒井懋(一九八六)『スモール・イズ・ビューティフル—人間中心の経済学—』講談社。
- 篠原岳司・高嶋真之・大沼春子、二〇一九、「都道府県立高等学校の学校設置者移管に関する研究、北海道奥尻高等学校を事例に」『北海道大学大学院教育学研究紀要』(二三五)、七七—一一頁。
- 高嶋真之・大沼春子・尹景慧・淡路佳奈実・川村睦月・杉谷真実・田宮弘貴・松

尾奈緒・篠原岳司、二〇一九、「北海道奥尻高等学校の町立化に伴う変化…
教職員・生徒・地域住民へのインタビュー調査より」『公教育システム研究』
(一八) 一―二七頁。

玉野井芳郎、一九七八、『エコノミーとエコロジー…広義の経済学への道』みす
ず書房。

玉野井芳郎・清成忠男・中村尚司、一九七八、『地域主義…新しい思潮への理論
と実践の試み』学陽書房。

玉野井芳郎、一九七九、『地域主義の思想』農山漁村文化協会。

報告①

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

町立に移管した島の高校に着任して考えた課題と方針

——全国募集と地域との協働——

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、町立移管、まなびじま奥尻、町おこし、総合的な探究の時間、小さい学校、地域人材、持続可能な地域社会

北海道奥尻高等学校は道立から町立に移管した高校である。清水信彦校長は二〇一九年四月に町立移管後の第二代目の校長として赴任した。リーダーシップと行動力を発揮し、二〇一六年に町立に移管した奥尻高校の高校魅力化の推進・発展と正面から向かい合い、地域との協働を行う高校のモデルとなるような実践を行っている。インタビューでは、着任してから見えたことは何か、これから奥尻高校が取り組む課題は何か語っていた。

奥尻高校は町立への移管をきっかけに、「生徒が満足する教育を受けられる」学校を目指して、文字通りの意味で町全体の協力を得て、高校魅力化、まなびじま奥尻プロジェクト、全国募集、寮の建設などが次々と実施された。

卒業生の進路は、以前の進学率が、三〇%〜四〇%だったところが、

今は七〇%ぐらいまで増えており、ここ数年、国公立大学へも進学している。

島に帰って来る生徒を育てたいというのが、高校の取り組みの重要な目標であり、戻ってこなくても奥尻の良さを伝えてくれれば島を盛り上げることに繋がる、と考えている。

奥尻高校は町立移管し、「せっかく残すのであれば、生徒が満足な教育を受けられるような学校」にするために、高校の教育活動の充実を検討した。六つの課題が浮かび上がり、それらの課題を解決するため、まなびじま奥尻プロジェクトが立ち上げられた。インタビューではそれぞれの課題について語られている。印象的であったのは、昨年と同じことをやっても衰退する、現状維持ではなく新たな発想で挑戦する、ということが学校全体に浸透しているとの語りがあったことである。

奥尻高校の場合、新しいことをするために新しいことをしたのではない。新しいことへの挑戦は、壮大な理想への挑戦やまったくもって新しいことへの挑戦として語られるのではなく、町立に移管して町民と生徒が町の課題に取り組む中で自然の流れで取り組んだことが結果的に新しいことに挑戦したことになったということである。

地域の課題と高校の課題が交差したところで協働する高校魅力化が、地域を活性化し、活性化しつつある地域からエネルギーを貰って「生徒が満足する学校」が作られていく、ということが起きている。

奥尻高校の場合、道立高校が町立に移管したことが高校と地域の関係が変わるきっかけとなった。そして、小さい学校であったことが奥尻高校のフットワークを軽くしている。

1 奥尻高等学校の概要と町立移管のインパクト

——それではお願いいたします。まず、学校のことを簡単に紹介して下さい。多くの人は、町立へ移行するということが意味がわかりにくいと思いますので。「道立から町立に移管することで、どのようなことが起きたのか」教えていただけますでしょうか？

清水信彦校長…これは私が赴任する前の話ですが、最初は人口減で、高校の存続問題に直面していました。「道立のままだと、奥尻高校の存続が危うい」と。それで、全国的にもあまり例を見ない、道立から町立への移管を選択したと聞いています。これはもちろん、町長、教育長、

町立移管前の三人の校長を中心に話をしながら、進められていきました。それで、町内から高校がなくなるということは、島にとっても大きなダメージになるという判断で、町立移管したということです。

移管当時の関係者がただ高校を残すだけではだめで、せっかく残すのであれば、生徒が満足な教育を受けられるような学校にしたいということ、で、「奥尻高校魅力化づくり」をしつかり考えられていました。学校の教育活動の充実が必要ということで、奥尻高校と奥尻島の課題について整理をして、それを解決しようということ、で「まなびじま奥尻プロジェクト」が立ち上がりました。今もそれを継続しつつ、常に新しい取り組みを付け加えながら、最先端の教育を進めているということです。

「学校だけではなく、地域の教育力を活かして教育活動を進めよう」という方針で、島全体の町民の方々に協力いただいて、「島全体で、生徒を教育しよう」と考えて、町長をはじめ、町役場や教育委員会、各産業の専門家らのところに協力を仰いだのが一番最初のスタートです。町の方々が、すぐく理解してくださって、「みんなで協力しようや」というような形で、「町全体の協力があったおかげで」ということが、一番かなと思っています。

町の大多数が賛同して一つの方向に向かっているというのが、大きいですね。

全国から生徒（以下、「島留学生」という）募集しているなかで、「募集したのはいいけど、生徒が住むところがない」という現状から、当初はまずは住むところの確保から始まっています。

最初は、奥尻島にある民宿に依頼し、島留学生を分宿させる方法をとって、今の二年生と三年生の島留学生は、一、三人ずつ民宿に下宿とい



清水信彦校長

うかたちで住んでいます。

ただ、それでも一年生の入る下宿が足りなくなつたので、「寮を建設しなければいけない」とのこと、町が寮建設に踏み切つたというのは、すごく大きいことだと思えます。

—— 大きいですね。

清水校長…今年の三月には二〇名定員の寮ができました。そして、さらに二二部屋増築することが決まつたので、全部で四二名定員の寮となります。

—— 「学校、生徒、地域の状況と特徴」はどのようになりますでしょうか？

清水校長…学校と地域との取り組みの中で特徴的なものは、「町おこしワークショップ」という取り組みで、地域の課題を発見して、それを解決するために地域の方々に助言をいただきながら、共に解決策を考え、最後には発表するものがあります。

奥尻島にはすべての産業が揃っていましたが、地元の後継者を育てる農林業や水産業、観光業などについて学ぶ機会がありませんでした。これからは、島の人的、物的な教育資源を有効に活用するというのが大事な時代なので、町の人の協力を取り込んで重要な取り組みとして行っています。

—— 町立に移管するときに、そのあたりのことが話し合われたという

ことなのでしょうが？

清水校長…そうですね。町立に移管して、「ただ学校を存続しただけでは意味がない」ということから、「それなら、奥尻高校ならではの最先端の教育やろう」ということで、「まずは奥尻島の課題を整理するところから始めていった」と聞いています。

2 卒業後の進路とUターン

——進路状況は、高卒後、いったん島の外へ出る生徒が多いのでしょうか？ それとも、卒業後、そのまま島で就業する生徒も多くなるのでしょうか？

清水校長…外に出て行く方が多いですね。島には進学先もないし、この就職先というのも限られているので、外に出て行く生徒が多いです。

昔は就職が多かったみたいですけど、最近は学力も向上してきたので、進学を目指す生徒が増えてきました。以前の進学率が、三〇パーセント、四〇パーセントだったところが、今、七〇パーセントぐらいまで増えています。ここ数年、国公立大学へも、合格しています。

——そうしますと、「いったん外に出てしまうと、帰ってこない」というようなことが心配になると思うのですけど。

清水校長…そうですね。そういう生徒、帰って来る生徒をなんとか育

てたいというのが、この取り組みの一つの目標でもあります。でも、戻ってこなくても、生活するそれぞれの場所で奥尻の良さを伝えてくれれば、直接的ではないですが、島を盛り上げることに繋がっていくのかなと思います。

——島根県立隠岐島前高校では「ブーメラン」というふうに言います。

清水校長…ブーメラン。

——あるいは、島根県立吉賀高校では「サクラマス」という表現を使って、「大きくなって戻ってくる」というようなことを考えています。

清水校長…そうですね。Uターンというか、その一度離れて大きくなって戻ってくる生徒を育てていきたいというのはありますね。

——そうですね。

清水校長…島留学生が、今年三年生で初めて卒業しますが、三人とも就職を目指しています。

——島内ですか？

清水校長…「島外での就職」です。ただ、今年の春の卒業生のなかでは、一人奥尻の観光協会に就職した生徒がいるんですよね、地元の生徒ですだけ。



今の二年生でいうと、ここで漁業体験をした時に、興味関心を持ちまして、「漁師になりたい」という生徒が三人もいるんですね。その生徒のなかでは、もしかしたら奥尻に残って、漁師になるというものもあるかもしれません。

なにせ、受入先がないとだめですし、すぐに漁師になれるような甘い世界でもないのです。いったん外に行って勉強してから、奥尻島に戻って漁師をやるっていうこともいいですし、そういう生徒が増えてくるとすごくうれしいですね。島全体で教育しているので、町民の方も成果として実感できるのかなと思います。

3 六つの課題

課題1 地元の後継者を育てる農業・水産業。観光業等について学べない。

- ・島の農業、水産、建設、土木、発電、地熱施設や人材の活用
- ・島外の講師の活用
- ・観光業に貢献する英会話教室の開講
- ・外部関係機関との連携による体験学習、共同研究
- ・学校設定科目「理科学研究」による探究学習

——いただいた資料で奥尻高校には六つの課題があるとうかがいました。順にお話しさせていただいてよろしいでしょうか。

清水校長…はい。

——課題1が、「地元の後継者を育てる農業、水産業、観光業等について学べない」とあります。この課題への対応はどのようなことをなさっていますでしょうか？

清水校長…これが先ほど言った「町おこしワークショップ」ということで。それぞれ、農林業や水産、観光など、そういう各分野の町の課題について、専門家の方々に来ていただいて、高校生と一緒に課題を共有して、そしてその解決策を高校生の目線でワークショップをやりながら考えていくという取り組みを総合的な探究の時間で取り組んでいます。

そうすると、町の方からいろいろな話をうかがうことができ、町の課題について高校生がしっかり考えて、その解決策を町の方々と一緒に考えていって、最後はプレゼンで発信して学んでいく取り組みを行っています。

——対象は何年生になりますか？

清水校長…全校生徒です。三年間通しての取り組みです。

——探究の時間のなかでなさるといことですか？

清水校長…はい。松原という教員が立ち上げたときの担当だったので、後ほど詳しく話が聞けるかなと思います。

課題2 地元に進学塾がなく、進学希望者を支援する社会的環境が整っていない。

- ・ 本校教諭の熱心なきめ細かい指導の継続
- ・ W i f i を活用した遠隔での講義視聴の実現
- ・ 小中も併せて英語教諭および町の A L T の活用
- ・ 島外の講師及びボランティアの活用
- ・ 出前講習の実施
- ・ スタディサプリ、到達度テストの活用

——それでは、課題の2の「地元に進学塾がなく、進学希望者を支援する社会的環境が整っていない」ですが、これは、どのような？

清水校長…そうですね。「大学進学に対応できるようなシステムをしっかり整備していかないと、やはり町に求められるような学校にはならないだろう」という課題があります。

これは島のデメリットというのでしょうか、進学塾が全くないんですよね。もちろん、大学とかもなくて。

なんとかそのハンデを解消しようということで、いろんな大学と連携して、大学教授や大学生に来てもらったりして、講演やワークショップ等を行っています。

それから、奥尻高校はwifi環境が整備されているので、進学塾がないという欠点を補うために、「Wifi二一ナー」という取り組みをしています。

これは、現役の大学生で高校生の相手になってくれる方を公募しています。そして、PC画面を通してながら、大学生との会話のなかで、大学生活について話を聞いたりあるいは、実際に受験勉強の仕方を教えてもらったり。ちょっとわからないところを聞いて、教えてもらったりしています。

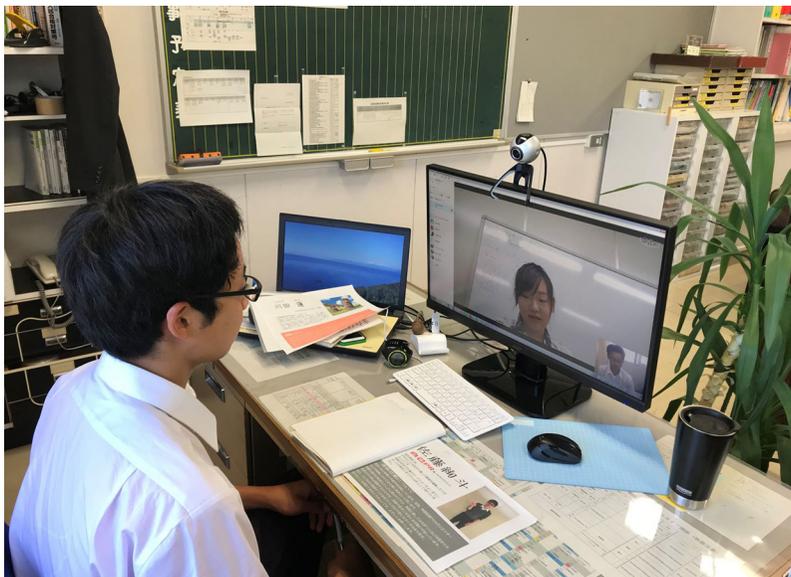
最初、慶応大学の学生さんでしたね。あとは、京都大学や札幌医科大学、北海道大学も協力してもらっています。これが、すごく好評で昨年、女子生徒でWifi二一ナーやっていた生徒は、マーケティングに興味を持って、受験勉強の仕方も教えてもらって、それで、小樽商科大学に合格しました。これはすごく実績を残している取り組みなので、続けていきたいなと思っています。

——これは、学校内にあるパソコンを使つてのみ、交流ができるかたちですよ、きつと？

清水校長…そうですね。

——で、これは一対一で個人でなさってるから、できやすいのかなと思っんですけども。

私の体験では、高校の授業場面と大学の授業場面をつなごうとすると、大体、時間が合わなくてうまくできませんでした。これ、Wifi二一ナーのように個別化してしまえばよかったですね。



清水校長…そうですね。個別化したことが良かったと思います。それから、今回も、北海道大学の学生さんが、新規に入ってきましたね。大学生も一回奥尻高校とつながると、自分の後金も見つけてくれて。それでつながってるような状況ですね。

——目から鱗でした。

清水校長…あとは、英語塾もないので、「グローバル化に対応する」というところにもつながると思うんですけども、「イングリッシュサルーン」という取り組みも行っていきます。

月に三回程度ですね。三つの地区ごとに。奥尻地区と、南の空港のある青苗地区、島の西側の神威脇（かむいわき）地区の三カ所で行っています。

特に、ここでは、オールイングリッシュで「いろんな話題について英語でディスカッションする」ということをしています。ALTの先生が中心になって、旦那さんもボランティアでやってくれています。青苗には高校の寮があるので、青苗地区のときには、寮生がたくさん参加しています。あとは、町民の方々が、近くの町民の方がその会場にそれぞれ集まってきた楽しくやっています。

——参加者は、高校生以外もいるのですか？

清水校長…中学生以上の町民の自由参加です。

——大人も？

清水校長…大人、はい。一般町民の方も参加されていて、楽しみにしているらしい町民の方がいます。月に二回、各地区でやるときもあります。今年は、二五回計画しています。

——生徒の勉強のことだけ考えたら「公設学習塾」を設置するところもあると思うのですが。こちらは？

清水校長…いや、人材確保の面と、やっぱりお金がかかるんですね。なので、それは公設塾ではなく、高校の教員でやっということ。

課題3 高等教育及び一部上場企業との接触がない

- ・ 慶應義塾大学や地域活性化をテーマに最先端の研究をしている大学との連携及び共同事業の構築

- ・ 地域活性化を推進する事業を展開している一部上場企業との連携

——それでは、課題の3に進みたいと思います。「高等教育及び一部上場企業の関係者との接触がない」ということですが、これの対策はどうされていますか？



清水校長…これは、大学ですね。最初は慶応義塾大学大学院SDMの先生方が本校に来てくれまして、本校としても町おこしワークショップ等、地域の活性化についての活動をするにあたってのご助言をいただいたところから開始されたと聞いています。それで、地域活性化をテーマにして、他の大学の先生にも講演やワークショップをしていただきました。町の事業で外部からいろんな方が島に来ているのですが、そういうときに高校にも来ていただくようにしています。

当初「地域の課題を探るのには、やはりQOL調査が必要だろう」ということで、その調査を進める時にも慶應義塾大学SDMの先生方と奥尻高校の生徒も一緒にやらせてもらいまして、「その結果分析したものを、高校生が慶応大学に行つて発表してくる」という取り組みもあつたようです。他にも最近でいうと、北海道大学大学院の教授が「奥尻高校の取り組みに、すごく感銘を受けた」ということで、すごく興味持ってくれてですね。奥尻高校の町立化についての研究論文で、「奥尻高校の取り組みは先進的でとても素晴らしい」ということを書いていただいて、それを生徒にも話してもらつたんですよね。そうなることや、奥尻高校生も、「外部の方々からこんなに褒められているんだ」、「評価されているんだ」ということで、自分の学校に誇りをもつようになりました。そのあとも、追跡調査ついでということで、北海道大学の院生さんや教授が、今年も七月の学校祭のときにも来てくれて、引き続き、奥尻高校のことを支援してもらつてます。

——個人的な関心になつてしまふんですけども、私もかれこれ六年間、ある高校さんと関わつていて。今年も八月に四泊五日で学生二〇名ほ

どとその高校を訪問して、高校生と大学生の協働探究学習活動をやったり、高校生と大学生が一緒になって地元の人のお話を聞いたりとか。それで、一〇月に、今度は高校生が東京に来て、東京の各所を共同研究で訪問するというようなことをやったのですが、いずれ私が定年退職してしまつと、どうやって事業を継続していくのかということがとても気になっています。

こちらの場合は、うまい具合に、慶応の先生、次に北大の先生がいらつしゃつたということで、そういうかたちでつなぐのが一つかなというふうに今、聞きました。

清水校長・慶応大学の方とは、今でもつながっております。今年、五月ぐらいに、当時から交流を深めてくださっている先生が来てくださいました。それで、「奥尻高校はこういう取り組みをしたらいいんじゃない」とかというアドバイスを受けたりしながら、そういうつながりは持ち続けています。

——いいですね。

清水校長：はい。北海道大学も、そうですね。二回ほど来ていただいて。それで、そのあとも興味ある大学生が増えてきたので、一緒に来てくれて。本校も、学校説明会で全国いろんなところへ行っていて、函館や札幌会場に行くのですけども、札幌会場に行ったときに、その教授と学生さんの五人が来てくれて、中学生とその保護者に本校のアピールをしてきてるんですね。交流した大学側から、本校の取り組みをいろんなところでPRしてくれるという、そういうつながりもでき

ました。あとは、札幌国際大学の教授、その方も、奥尻高校のこの取り組みをすごく理解してくださつて、支援者として、月に一回ぐらい奥尻高校に来てくれるような、そんな頻度で七月まで来てくれていました。東京や大阪で学校説明会を行ったときも、一緒に来てくれて本校のPRをしてくれました。

——そのアイデアいただけます。来年、東京でのフェスタが続けば、青学の学生と一緒に、あの会場に行きます。

清水校長：とてもありがたいことです。説明会では、われわれがPRするのはもちろん大事なんですけど。支援者や周りの方から応援してくださると、すごく信憑性があつて、とても助かります。なので、自分は、島留学生の保護者の方を会場に呼んだり、生徒と一緒にいけないので、生徒は「ビデオを通して、生の声を届ける」ということで、インタビューしたものを画面を通して伝えるというような工夫をしています。

——そうですね。

清水校長：ええ。札幌会場では北海道大学の教授の方と、それから学生さんが、熱くPRしてくれたのがありがたくて、すごくよかったです。これもやはり、大学との関係がなければ、できなかつたことかなと思います。

それで、先ほど、「協働探究」とおっしゃっていたんですけども、奥尻高校は北海道大学水産学部と一緒に海の保全について研究していま

して、マリンチャレンジプログラムというのですが、奥尻島の海の磯焼け問題についての共同研究で、「磯焼け対策について、どのようにしたらいいか」というのを高校生なりに考えて、それを発表するという取り組みをやりましたね、去年、今年と。

ウニが海藻を食べてしまつて、海藻がない状態を、磯焼けといいます。その状態になると、魚が寄つてこなくなるので、「何か対策はないか」「海藻を食べないように、ウニの嫌いな海藻を研究して、それをそこに植えたらいいんじゃないか」とかを考え、研究した結果を発表しました。去年は、全国で三位でした。今年も発表したんですけど、入賞にはいたらなかったんですけども、そんなことを、北海道大学水産学部の学生さんと、もちろん教授の方の助言をいただきながら研究しています。

—— いいですね。

清水校長…はい、これも、来年は教科の理科のなかで、探究学習というかたちで取り組んでいこうと思っています。

—— 探究の時間じゃなくて、教科の時間にやってらっしゃるんですか？

清水校長…教科、理科研究という学校設定科目なんですけども。そのなかでやっていこうと思っています。

—— 総合の時間、探究の時間よりも、教科の方に近づけてなさるといふことはなかなか難しい部分もあると思います。





清水校長:そうですね。今は、どの科目も学習指導要領自体がもう「探究」とうたっていますので、総合的な学習の時間だけではなくて、各教科や教科横断的に教育活動全体で行うように、「どの教科も『探究』というテーマでやる」ということで、今進んでいます。

課題4 地元の将来や発展につながる学習プログラムがスクーバダイビングしかない。

- ・ 次年度以降の学校設定科目「奥尻創生アプリ学」の開講に向けた準備
- ・ 総合的な学習の時間における学習内容への導入及びプログラムの構築

——それでは、続いて課題4について、お願いいたします。エメラルドグリーンの海というのは、あちこちで見ますけども。ここでは、奥尻ブルーと表現されています。海の色が全然違うので、それ自体が特色なのかなというふうに感じました。

清水校長:そうですね。「奥尻ブルー」と言っていますね。地元の方は「日本一きれいな奥尻ブルー」、そういう誇りを持っています。この自然を見ただけでも魅力があって、「こういうところで学びたいな」と憧れをもって入学してくる生徒もいるのかなと思います。

——次、もし来るチャンスがあったら、今度は冬に来たいと思つていきます。

冬の奥尻島というのはまた、きびしいのでしょけども、別の魅力があるのかなというふうに。

清水校長：ただ、私もまだ冬を過ごしてないのですけど、島の方は「冬は何もない」と言うんですね。「過ごすのにもきびしい」と島の方は言っています。飛行機は飛ぶみたいですが、フェリーが欠航すると、やはり島に物がなくなるようで、一軒コンビニがあるのですが、「コンビニの売り物もなくなるような状態で、きびしくなる」って言っていました。

「冬をどう過ごすか」というのが、奥尻島の永遠の課題みたいですかね。

——そうですね。ぜひ、それを体験しにきたいと思います。

清水校長：本校の大きな特色の一つにスクーバダイビングがあります。ただ、「将来につながる学習プログラムというのを、どんどん増やそう」ということで、情報科目で、学校設定科目の「奥尻創生アプリ学」を導入して、「情報で、地域に役に立つようなアプリを開発しよう」というようなことも教科、学校設定科目の中で今、やり始めてます。

最初は、魅力を伝えるようなものを何かつくってみたりしました。今やっている途中なので、まだ完成品はできてないですが、「役に立つようなアプリをつくらう」という目的で行っています。

課題5 生徒が町のイベントの企画・運営に協力する十分な体制が構築されていない。

- ・朝のSHR前の時間や、昼休みの活用
- ・四五分七時間授業による総合的な学習の時間の増量
- ・教育課程上の位置付けの明確化
- ・地域の将来や発展につながる学習プログラムの創出
- ・町のイベントの質的向上を図るための生徒による企画・提案の機会を設定

——それでは、課題の5をお願いします。

清水校長：はい。「生徒が町のイベントの企画・運営に協力する十分な体制」ですが、昔は、高校生が町のイベントに携わるといことは、ほとんどなかったようです。

でも、「町おこしワークショップ」の観光や祭りという分野で、「課題を見つけて、それを解決する」という取り組みをやっています。町には三大祭りがあり、その祭りのイベントの内容がほぼ毎年一緒で、マネリ化しています。そこで、「祭のおもしろいイベントを考えよう」と町おこしワークショップのなかで、観光協会の方と一緒に考えて、そして、つい先日ですが、「なべつる祭」というものがありまして、海洋研修センターの裏に大きなスペースがあるので、そこで祭が行われます。そこで、そのイベントのなかで、ゲーム的な要素のもので、例年はビンゴ大会とかやっているんですが、「それ以外の、なにかおもしろい企画はないか？」ということで、足つぽを並べて、なわとびで



そこをリレーするような、「なわとび足つぼりリレー」というふうに名前をつけて、それを高校生が企画して、町の観光協会の方に提案したら実現したというようなことが今回ありました。今年、町おこしワークショップでは、課題解決のための案を考えるだけではなくて、それを実現ということで、アクションプランというか、今年は「実現まで持っていこう」、「昨年よりもさらに」ということでやっています。その実現例として、町のイベントに高校生が参加することも含め、今は企画まで携わってきている状況です。

課題6 部活動や大会で外に出ることは多いが、島外の高校生が島に来ることがない。

- ・ 体育文化後援会の寄付金徴収及び還元
 - ・ 遠征先の関連機関からの援助申請
 - ・ 他校からの合宿の誘致、町内施設の有効活用
 - ・ 一流講師を招いての他校合同の合宿の開催
 - ・ クラウドファンディングの流れを受け継いだOIDの活動
- ※OIDは部活動に位置づけられており、Okushiri Innovation Division (オクシリノベーション事業部) の略。

——課題の6は、どうなりますでしょうか？

清水校長…やはり奥尻島にいますと、遠征には出ますけど、フェリー代

が余計にかかるので、周りから島には来ないですよ。奥尻高校に練習試合に、島外から生徒が来ないというのがあって、それを、「島外の高校生が島に来ることがないので、何とか呼べないか」という課題もあって取り組んだのですが、これちよつと話が長くなるかもしれないですね。

クラウドファンディングを二年前にやっただけですよ。それは、「部活動の遠征費がどうしてもかかるので、何とか練習試合を多くさせるためには、その遠征費を自分たちで集めよう」という企画を、高校生が提案したんです。高校生が立ち上がって、クラウドファンディングでお金を集めました。その返礼品として、自分たちで作ったTシャツを送るということをやっただけです。それで百数十万円というお金がたまると、そのお金を部活動を支援する部活動費ということで遠征費に充てたりしました。

その逆に、「島の外から呼ぼう」ということで、昨年野球部が今年の夏の全道大会決勝まで行った札幌国際情報高校や札幌の月寒高校や、静内高校を呼んで、一〇〇名近くで、夏休みに合宿をしました。宿泊費とかをかけたために、町民センターに宿泊してもらって、「宿泊代が浮くので、フリー代かけても来てくれるだろう」ということで呼んだようです。

そうするとやっぱり、奥尻高校に一〇〇人も野球部の生徒が来るということ、町も活性化するわけじゃないですけど、人を呼べる島になったし、それから、向こうも宿泊費が浮くので、奥尻島に来て普通に合宿できるような、そんな体制も整えることができました。

ただ、これは、町民センターを借りるのに、やっぱり町の協力がなければだめなので、島全体で受け入れるような、そんなかたちでの課



題解決をしました。今年は「津波サミット」スタディツアーの受入があるのですが、実現はできなかったんですけど、来年はその津波サミットがないので、すでに来年度は何校か来るという話があって、今の段階でもう計画しているところです。

4 フットワークの軽さ

——課題1から課題6までをうかがっていて、すごく印象的なのは、「フットワークが軽い」ということです。

清水校長…そうですね。

——校長先生も、これまでいろいろな高校を見聞きしてこられたと思うんですけども。

「このフットワークの軽さというのは、実感としてはどうでしょうか」ということと、「どうして、そういうふうに軽くできるんでしょうか」ということをお願いします。

清水校長…やっぱり、小さな学校、小規模の学校で、小回りが利くということですよ。

あとは、一番は道立から町立に移管したことで、島民の方々が「やはり町で高校を守らなければいけない」ということが浸透してまして、何をやるにしても、周りの理解を得られるということがすごく大きいなどという感じはします。

何より、立ち上げ当時の校長の発想力やリーダーシップであったり、

そういう部分があれば絶対動かない話なので、それに協力する教員が、みんな初任で若い教員がたくさんいるんですけども、やはりその若いエネルギーが、どんどん進めていける原動力のかなと思います。今年も様々な新しい取り組みに挑戦しているんですが、若い教員が「やります」みたいな、そういう賛同を得て、「じゃあ、自分たちでできることは何があるか」とかかって積極的に参加するという、そういう体制があるからこそできるのかなと思います。

——清水先生自身は、「この高校がこういう高校である」ということを理解したうえで赴任されたのでしょうか。

清水校長…全てを知っていたわけではないですが、この「まなびま奥尻プロジェクト」というのはメディアに出ていましたので、「先進的な取り組みをしている高校だな」という印象で赴任しました。大まかな概要しか知りませんでしたが、これだけの最先端の教育を一気にやっているような学校というのはなかなかないので、「すごい学校」という印象で来ました。

「立ち上げるのも大変だけど、維持するのが大変だよ」ということを、周りの先輩校長から言われてですね。「しっかりと継続させるのが大きな役目として赴任するので、とても大変だけど頑張つて」と言われてプレッシャーを受けて来ましたが、何とか持続・発展させていかなければということ、今考えてやっています。

ただ、維持するのは、昨年と同じことでやっても衰退するので、それはもう、「これまでのものを受け継ぎつつ、新しいことにも挑戦して少しずつ前に進んでいく」ということを念頭に、四月からはやってき

ています。

町おこしワークショップもそうですね。課題だけを考えるだけでなく、実現に結びつけることが重要なので、一歩ずつ前進していく考えで行っています。

——そうですね。

清水校長…ええ、それを「必ず実現する」ということをステップとしてやるというようなことだったり、あるいは、学校祭にしてもそうですね。今回、昨年と大きく内容が変わったんですけど、現状維持ではなく新たな発想で挑戦するという意識は学校全体に浸透してきている状況です。なので、ほんとに「持続・発展」させることがここでの自分の最大の任務なのかなと常に思っています。

——なるほど。インタビューの内容とはずれちゃうかもしれませんが、

私がかかわっている取り組みも、自分が年齢を重ねてくると、毎年毎年新しいことをやるのは、ちょっとしんどくなります。

清水校長…はい、なります。

——で、校長先生は、初任とかの若い先生とは違ってしんどいでしょうし。それから、町の人にとっても、年をとると、変化がないことを好むような人もいると思うんですけども。そんななかで、実践されているのはすごいなと思います。

清水校長…ありがとうございます。そうですね。町の方の中にもあんまり変化を好まない方もいらっしゃいますが、勿論これまでの伝統を継承しつつ、新たなことも取り入れていくような方針でやっていきたいと考えています。

5 地域人材とは

——それでは、先に進ませていただきます。いただいたプリントにある「地域人材」についてはこれまでのお話の中で「Uターンしてほしい」、あるいは、「島のことを好きになって、外へ出て行ったあとで戻ってきてほしい」というお話があったと思うんですが、校長先生のお考えでは地域人材とは、どのような人材のことになりますでしょうか？

清水校長…「地域人材」については、「地域や社会の課題を発見して、解決につなげることができる人材」を育てようという考えを持ってます。「持続可能な社会づくりの主体者を育てよう」というコンセプトでやっています。

——いただいたメモで「地域」を「持続可能な地域社会」と言いかえてよろしいですか？

清水校長…はい、「地域社会づくりの主体者」ということで。今の高校生が将来的にはこれからの時代を引っ張っていく人材なので、なんと

校 創 自 実 創 自 実 訓 造 律 践 造 律 践

かここから地域発展に貢献できるような人物を育てたいこうということです。その取り組みのなかで、やはり「町おこしワークショップ」などの取り組みで自ら課題を発見し、解決策を考えることに取り組ませていることに意義があるのかなと思います。

——具体的な資質能力としては？

清水校長・奥尻高校で身に付く資質能力はたくさんあるんですけども、今年はこの五つに絞って、学校教育目標を踏まえて、その言葉からリンクした資質・能力を育成しようと教育をしています。

——「創造、自律、実践」。

清水校長…はい、それが校訓です。

——で、その下に五つあります。「育成を目指す資質能力」の五つの力、課題対応能力、創造力、実践力、人間関係形成能力、発信力・表現力、この言葉ですね？

清水校長…はい。そうですね。本校の学校教育目標のなかには、もうこれからの時代に必要な、具体的な資質能力というのが網羅されてました。「この五つを育てたい資質・能力の重点に」ということで、今年はずまず教育を展開しています。

——では、まだ今年始まったばかりなんですけど、どうでしょう？



清水校長…この五つの資質・能力は、私来て五カ月経ってますけど、確実に身につけてきていると思います。

——これはやはり、先ほどからの地域おこしワークショップとか、さまざまなイベント、

あるいは、津波サミットなんかを見てもそれを感じたんですけど。そういうのを通して身につけている？

清水校長…そうですね。「人間関係形成能力」を身に付けさせることにも力を入れていまして、本校ではピアサポートプログラムを年六回もやってるんですよ。中高一貫教育を行っていますので、「中高合同のピアサポート」という形で、上級生が下級生にだけでなく、高校生が中学生のメンターになりながら人間関係づくりをする取り組みも行っています。

グローバル化ということで、八月末にインドネシアから高校生の留学生が一名来まして、今、二年生のクラスに入っています。その留学生も、日本語があまり話せなくて、英語はそこそこ話せるんですけども、そういう留学生も身近に受け入れながら、グローバル化に対応できる力が身に付くのではないかと期待しているところです。

——「どのようにして育てるか」の部分で、「実践力」のところに、「独自で開発した、新防災教育プログラムの実践」とありますけども。これは、どのようなことをなさってますでしょうか？

清水校長…先ほど観ていただいた授業も防災教育の一つなんですけども。

日常と災害を「シームレス」といつてるんですけど、日常と災害をつなぎ合わせて、普段から考えていくような新防災教育プログラムということ、例えば、「どの方法で逃げたら一番時間が短縮できるか」というのを数学的な考え方で。それを、実際に体育の授業のなかで実践してみても、そして、情報の時間で分析したものを発表するというような、「数学、体育、情報」の三教科が、教科横断的に防災に関しての教育を行っています。

——具体的な資質能力の五項目を対象に、「具体的にこういうことをしよう」というのを職員の間で話し合う、あるいは、計画を作るということをなさっていらっしゃるのでしょうか？

清水校長…私が校長に赴任して、学校教育目標から生徒に身に付けさせたい五つの資質能力を明確化して、具体的にどの活動で身に付けさせるかを考えました。当然、その活動ひとつひとつに対して、職員間で話し合い、計画して行っているところです。

——「活動を対応させた方がいい」ということなんですけども。これは、「先生方に対する効果と、生徒さんに対する効果という観点からその方がよい」というふうに判断されているわけですか？

清水校長…はい、そうですね。

——先生方もこういうふうに位置づけると、自分のやることが何なのかということがわかりやすいですか？

清水校長…はい、わかりやすいと思います。ただ来年に向けては、個々の生徒に身に付けさせたい資質・能力について、改めて先生方で考え直そうかなとも思っています。

——すばらしいですね。先生方が自分で目標を立てて。そうすると、あとで自分のことも振り返れますよね？

清水校長…はい、そうですね。

——与えられた目標ではないわけですから。

清水校長…はい。なので、先生方で生徒に身に付けさせたい資質・能力を考え、取り組みひとつひとつについても、これからどういう取り組みにして生徒を育てるかを話し合っていて、そして、学校全体で一つの方向に向かう、そんな学校にしていければと思っています。

——以上で終わります。ありがとうございました。

報告②

(特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

(1) 経緯、教員集団の変容と教師の成長

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、町立移管、小さな学校、トータルコーディネートの進路指導、全教員
で実働、いい意味の忙しさ、周りを巻き込む

町立に移管した奥尻高校が取り組んだことについて、松原聡史教諭、井上壮紀教頭、清水信彦校長の三人の先生に対して集団インタビューを行った。

町立への移管の時に奥尻高校は隠岐島前高校を視察し、同校がしていることを奥尻高校でも行いたいと考えたと言う。

視察とは別に進路指導の視点からは、卒業生が島外に出てから進学・就職先での人間関係に苦しんでいるので、高校時代に新しい人間関係を体験させることを目標にした。もう出口教育をするような時代でないことは分かっていたので、トータルコーディネートを志したとのことであった。奥尻高校の一番の理想は卒業生が大学で勉強したり、社

会でいろんなことを経験したりして、いつかは島に帰ってきて、島のために働くことである。そういう気持ちを育てていくことを進路の使命としたという。

インタビューでは若い先生の教師としての成長について、自分で考えて町の人と話をし、悩んで、みんなで協力して作って、生徒が成長するのを喜んで泣いてっていう学校なので、若い先生にとっては最高のスタートになる……と語られた。

教員が育つことについて尋ねたところ、小さな学校で、尚且つ自分が考えたことが実現できるので、やりがいを感じるようになる。町おこしワークショップは自分が手掛けて、みんなに協力してもらってやっ

たんだという自負や、達成感を感じるようになる。言われたことだけやっているというのは、ほんとに三カ月ぐらいいでもう許されなくなる。そこが重要であるということであった。

教員の成長が感じられるのは、プレゼンがどんどんうまくなることで実感できると言う。

高校魅力化の取り組みの運営組織は教師集団の成長の状況や取り組み内容の変化に応じて変わって行ったことが分かる。たとえば誰を呼ぶかは、一年目は特に担当はなく、この人面白そうだねって言いながら決めたという。二年目はもうちょっと形にしたいという思いから、進路でやらせてくださいって言って進路に持ってくるみたいな感じで、結構みんなで取り合う感じになったという。去年からは「すいません、全員でやりたいんですけど」という提案に対して「いいよ!」となり、全教員で取り組んでいること、全教員が担当だけでやらせようなんて思っていないという雰囲気があること、が語られた。

また、島の抱えている課題は結構ほんとにギリギリのことなので、それをみんなで何とかしたい。仲悪くなっていたら、停滞してしまうという危機感がある。まず自分でやってみなさいということでも若い教員も育っている。周りも巻き込みながらやっていかなければ駄目なので、それが奥尻高校の教員集団の組織がうまくいっているところだとの語りがあった。

※二〇二〇年四月一日付けで井上教頭は北海道札幌英藍高等学校へ、松原教諭は北海道伊達高等学校へ異動されました。

1 奥尻高校の魅力化の背景と目的、誕生の具体的ななきっかけ

—それではお願いします。奥尻高校については、去年まではほとんど知らなかったんです。去年の留学フェスタで、まずこのポスターが目にとまりました。奥尻ブルーの中で、生徒さんがスキューバダイビングをしていました。どんなところだろうということ、どんどん関心が高まりました。

私自身も島根県の吉賀高校と都鄙(ひ)間高大協働探究活動を行っています。高校生、大学生にとってはとてもエキサイティングだし、大事な体験になっているに違いないと思ってやっています。本日は、質問の中で調査研究的内容とそれから自分がやっている実践をどうしたらいいのかと考えている視点との二つから質問させていただきたいと思います。

松原教諭：サクラマスプロジェクトがある。

—そうです。吉賀高校ではサクラマスという言葉を使っています。

松原教諭：すごい。面白いですね。やっぱり起業家教育なんだ。すごいですね。面白そう。

—ありがとうございます。ここに書いてあることを順番に質問させていただこうと思います。奥尻高校さんの魅力化の取り組みについて



君の限らない可能性を閉じ込めている
固い殻を破り
出逢えます 新しい自分に

北海道奥尻高等学校
Hokkaido
Okushiri
High School

北海道奥尻高等学校
〒043-1402 北海道奥尻郡奥尻町宇赤石411-2
TEL: 01397-2-2354 (事務室/FAX)

奥尻町教育委員会
〒043-1401 北海道奥尻郡奥尻町宇奥尻314
TEL: 01397-2-3890 FAX: 01397-2-3891

Facebookページ
<https://www.facebook.com/Okushiri/>

本校ホームページ
<http://www.town.okushiri.lg.jp/highschool/>

まなびじま奥尻での学び
離島だけど意外に近い



お伺いしたいと思いますが、まずその背景と目的、誕生の具体的なまきっかけのあたりをお願いいたします。

2 町立移管がきっかけで

トータルコーディネートの進路指導を

松原教諭…町立移管をして、そのときの校長が隠岐島前高校に一度視察に行つて、こんな学校もあるんだよって話をまずしていただいたのと、そのときにもう生徒数も人口も減つてつていう課題はずつとみんな持つたので、何かしなければねつていうところで、隠岐島前高校の情報を得て、奥尻でもできないだろうか。生徒を呼び込むつてことは可能なのかつていうことで、そのときのメンバー、校長がメインになつていろいろと住む場所とか、ほんとに受け入れることは可能なのかとか、ルール上の問題もなんですけど、あとはそもそも来たつてつていう子はいるだろうかみたいな感じで募集をかけるようになつたつていう形ですね。

僕はそのとき進路担当で、そのときに進路指導部が抱えてた課題の一つとして、卒業生を出しても、帰つてくるのがすごく多かつたんですけど、その理由の一つが生まれてから高校までずっと同じメンバーで生きてきた中で、島外で初めて新しい人間関係の中で生きていかなきゃいけないというそのときに、ほとんどの生徒が苦しんでた。

という意味では、高校生のうちに今まで一緒に暮らして来てない人と関わる経験をさせてあげられれば、島内の子たちにとつてはすごくプラスになるというのが進路指導部としての気持ちというか。なの

で、ぜひそこは入れてほしいというのが進路の考えでしたね。で、入ってきた感じですかね。五人ですね。スタートは。

それで、生徒を呼ぶようになって、僕たちは新しい企画というよりは、もともとあった取り組みをより良くしてこう、みたいな感じにあったのかな。ただ、まなびじま奥尻プロジェクトというのは校長がドーンと打ち出したので、今、奥尻高校にあった課題を全部あぶり出して、それに対する対応をどうしたらいいんだろうっていうのをできることからどんどんやっていったっていう感じですね。

——進路指導が進学させたり、就職させたら終わりというようなことも起きがちだと思っんですけども、進学、就職後の生活のことにまで関心が及んだというのは、どういったことだったんでしょう？

松原教諭…もう出口教育をするような時代ではないっていうのは、もうわかり切っていたことなので、トータルコーディネートっていうイメージを進路では持っていました。やっぱり問題は島をどうにかしようって思う人たちがなかなかない現状もあつたりネガティブな人も結構いたりして、そうではないよねっていうところもやっぱり日々感じてはいたのかな。そう考えていたので、一番の理想は子どもたちが大学で勉強して、社会でいろんなことを経験して、いつかは島に帰ってきて島のために働くっていう、そういう気持ちを育てていくことが進路の使命だと思って話し合っていたので、そういう意味では入れちゃえばオツケーっていうのは全然考えもしてなかったですね。

——その場合、大学に行って何を学ぶとか、どのようなものを見てく

るとかそこまで踏み込まれたことはありませんか。

松原教諭…はい。結局目指すはUターンとSターンなので、島内出身の子はUターンしてほしいし、島外からきた子は高校で学んで出てまた戻ってくるSターンをしてもらいたいの、やっぱりどこどこで大学に入れたらオツケーではなくて、そこで何やるんですかとか、それが結果的に島のどういう課題につながってくるのかってところまでなってもいいと思っんですね。

その子の人生なんですけど、ただそういう視点では見てもらえた方が、そうしないとこの島がなくなってしまうので、消滅可能性都市四位なので、その危機感はかなりあつたかなと。やっぱり彼らの故郷をなくすわけにはいかないという思いはすごく強かったんです。

——松原先生はさらっとおっしゃいましたけど、なかなかそこまで考えるっていうのは、稀なケースとは言いませんけど、そこまで考えるのは難しいと思っんですね、それは何かがあつてそういう考えに至ったんでしょうか。

松原教諭…どうなんですか？

井上教頭…どうなんだろうね。一番大きいのは町立になったからだよね。みんなで危機感を持ったんだよね。

松原教諭…そうですね。僕が来た年は、初めは道立なので、四年間もしくは、五年間ここで我慢すれば札幌とかに行けるみたいな雰囲気だった

たんです、正直。

なので、山の上にあるので、ちよつと別枠。何かイベントがあつてもうちは高校だからっていうのが正直あつたとは思うんですよ。ただそれが町の学校になつたので、教育委員会の人と話す機会も増えてくるし、役場の人たちと付き合うことも出てくるっていう意味ではやっぱり。

で、うちはすごく若い教員が多いので、そういうことになんか柔軟に対応する方なのかなど。何よりやっぱりそっちの方がすごく価値ある教育な気がしてるが多かったですね。確かに数学だけ教えて、偏差値上げたと言えるっていうことも素晴らしいんですけど、それはほんとにここでやることなのかというか、それは別にそういう学校があるので、そこでやってもらえれば良くて、島だからできることは何だろうって考えると、生徒数がすごく少ないので一人一人どういう生き方したらいいんだろうってみんなで話し合つたり、面談したりはしやすいので。

3 教員の地域、生徒、高校に対する思い

——町立に移管することで、例えばこの高校の在任期間と言つんですか。それも長くなるわけですか？

清水校長…いや、そこは特に変わらないですね。

——松原先生は、ご結婚なさつてるように思つんですけれども、家族つてこちらにいらつしやるんですか？

松原教諭…家族でいます。

——家族で来てるんですか。

松原教諭…ちよつと僕、もともと期限付きでこの島の中学校にいて、一年だけ離れて、教員採用試験に受かつて、高校で戻ってきてるんですよ。で、嫁は来てて、子どもはこの島にいる間に生まれた子たちなのでつていう感じですね。なので、うちの息子にとつても故郷はここのので、やっぱり大切にしたい。

——ほかの若い先生は別に結婚してなくても、この町を大事にしたいといった町に対する思いが強いのでしょうか。それとも高校や高校生に対する思いが強いのでしょうか？

松原教諭…どうなんだろう。どつちもなのかな。去年異動した教員がみんな口々に言つたのは、初任がここで良かったつて言つてやっぱり出て行きますね。結局言われたことだけやつてればいい学校ではないので、自分で考えて町の人と話をして、何が必要なのか悩んでみんなで協力して作つて、生徒が成長するのを喜んで泣いてつていう学校なので、若い先生にとつては最高のスタートなのかなつていう感じで結構みんなワイワイやつてるんだと思つんです。

——素晴らしいことだと思えます。若い先生は最初は大きな学校で育てべきだと主張される方もいらつしやる中で、この学校に来たから



こそ自分で主体的に動けたし、生徒の成長も見ることができたという、
そういうふうになりました。

清水校長…今の教育には合ってるのかなと思います。答えはないはず
なので。この学校は生徒をきちんと見て、ともに悩んで、常に関わっ
ていて、答えがないはずの教育を日々実践して、主体的に動く生徒を
育てています。毎年同じ企画をやるわけにはいかずに、入ってくる生
徒は質が全然変わるので、同じ企画を同じようにやっても全然通じな
くなくなってしまいます。生徒を見てちよつと変えなきゃとかこういう段
階に来たからこういうステップを踏んで、レベルアップしたこれをや
るといって進めています。

4 取り組みの運営組織

——次に取り組みの運営組織について教えてください。例えば、町お
こしワークショップの運営組織など。

松原教諭…町おこしワークショップっていうのは、もともと昼休みに
やるかなって言って、町の人を呼んできてしゃべってもらいたいな
ところからスタートしているので、担当は特にいないんですよ、ス
タートは。ただ、誰呼ぶかっていうのは、この人面白そうだねって言
いながら決めたぐらいで、二年目はもうちよつと形にしたいよねって
いうことで、進路でやらせてくださいって言って、進路に持つてくる
みたいな感じで、結構みんな取り合う感じですかね。これはうちで
やりたいとか、これはうちでやりたいよとかっていう感じで、組織



は一応、普通の学校のように教務部があったり、生徒指導部があったり、進路指導部があったりはするんですけど、このイベントは誰っていうのはそこまでない感じかなと。

——なるほど。

松原教諭…結構うちの先生たちはほんと面白くて、例えば町おこしワークショップってというのは、もともと進路だけでやっていたので、実際は三人で回していたんですが、去年から「すいません。全員でやりたいたいんですけど」って言う結構「いいよ」って言う先生たちなので、去年からは全教員で取り組んでいるので、音頭を進路でとっているだけで、実際実働で動くのは全教員という。うちは結構そういうの多いんですね。講演会だったり、誰か来てもらっても担当者だけが体育館にいるのではなくて、全教員が楽しそうに観に来るので比較的そういう感じかなっていう気はしますね。

——場合によっては、探究の時間なんかでも、それは理科だけにやらせとけばいいとかそういう学校もないではない中で、みんなやっていくのですか。

松原教諭…雰囲気なんでしょうね。当たり前前に、

清水校長…全体でやらなくてはいけないというふうに、みんな思ってるんですよ、全教員が。

要するに担当だけでやらせようなんて、さらさら思っていないという

雰囲気があります。

松原教諭…思っていないですね。

井上教頭…今、松原が言ったように担当はまずその企画して、音頭をとるような形で、それを全員でやりましょうというのが、ほとんどの行事のスタイルなのかな。

で、そこに地域の方々を巻き込んでやるっていうのがうちの最大の魅力だと思います。

—そうですね。

5 教員が育つとは

清水校長…やっぱり大きな学校だったら、例えば生徒指導の中でも、変な話、落とし物係とか一つの担当しか当たらないんですが、この学校は小さな学校で、尚且つ自分が考えたことが実現できるんですね。

そのことにやりがいを感じると思っていますよ。町おこしワークショップは自分が手掛けて、みんなに協力してもらってやったんだという自負というか、そういう達成感みたいなのも感じるだろうし。そうして教員の力が伸びるので、それは奥尻高校から異動したら、その学校で中心的な役割を担うことができるような教員が育っていくのかなと。生徒もそうだし、教員もほんとに育つようなそんな学校なのかなと思います。

—松原先生の目から見て、あの先生は変わったよな。伸びたよなというの、どんなふうにしてわかりますでしょうか？

松原教諭…結局、もう言われたことだけやってるのは、ほんとに三月ぐらいでもう許されなくなるので、そこだと思います。職員会議も最初の一カ月目とかで当然しゃべられるので、最初は緊張して何しゃべっていいかわかんなかった先生が、ブツブツ練習して、次の職員会議ではもうペラペラしゃべったり、何か資料作ってプレゼン風にしてみたり、寸劇やってみたり、とにかく伝えること大事だよなって、そもそもそうやって生徒に言ってるよねってなったり、見てて単純に生徒と変わらないと思います。

プレゼンは、どんどううまくなったり、生徒にプレゼンの見本を見せるために自分のプレゼンを練習するのでそういう成長は多いのかなと。面白いです。だから今週やるピアサポートっていうのも、養護教諭が全部仕切るんですけど、今年からその先生が仕切って、全七回あるんですけど、入学して次の日にまず一回目やって、緊張してもらう口からつかってやってたんですけど、今、結構余裕ぶってやっていますね。

清水校長…仕切るのが当たり前のようになっていますね。

松原教諭…今年度一番最初に全校生徒の前でしゃべったのが養護教諭っていう。

清水校長…三年目の養護教諭です。



6 みんなで力を合わせる理由は、忙しいから

——教員同士で後ろ指を指すとか、陰口を言うとかそういうことがないというのは、どういう秘密があるのかわかりたいです。奥尻高校のことを報告書に書いたら、でもうちの学校の雰囲気じゃそれは無理だと思われるしまう場合もあるかと思いますが。そういう時に参考になるような何かがあれば教えてください。

松原教諭…後ろ指、指されてるんですかね（笑）。正直わかってないだけなのかな。いい意味で余裕はないのかなと思います。島の課題は結構ほんとにギリギリのことなので、時間のかかる仕事は、この学校はそこまで忙しい学校ではないと思うんですが、島の課題は結構やっぱりほとんどの課題なので、それをみんなで何とかしないかっていう思いはすごくあるのかな。あとは何でしょうね。でも、最初来た年は陰口ありました。それはほんとに覚えてます。その場から一人いなくなったら、みんなでその先生の陰口を言ってみたりとか、よくありがちな。

清水校長…職員室？

松原教諭…職員室はすごかったですね。今は全然それがなくて、それはなんでなんだろうな。

清水校長…いい意味で忙しいんだよね。

松原教諭…そうですね。

清水校長…そんな人の陰口言ってるような暇がなくて、みんなでやらなくて、ここでの取り組みは絶対継続できないので、そこで人の陰口を言ってる、仲悪くなっていたら、停滞してしまうという危機感もあるんで、そんな雰囲気があるところが大きいのかなと思います。結構生徒に主体的にやらせることも多いんですよ。

教員が失敗してもいいからやりなさいというようなスタイルがあった、それを教員でも松原先生みたいなミドルリーダーが初任の先生方に生徒と同じように、やっぱりやらなければわからないことはあるの、すべてリーダーがやるわけではなく、まず自分でやってみなさいということ、若いうちも育っています。

だから、さっきの養護教諭ではないですけども、ほんとには人前でやるのはすごく苦手というような先生でも、四月からやっていて、ほんとに普通に当たり前のように、全校生徒の前で運営していくような、そういうことができるので、教員もほんとに育っています。あとはみんながそれぞれが忙しいので、自分の役割が決まったら人任せにできないということもあるんですよ。

松原教諭…それはあるかもしれない。

清水校長…責任を持って、最後までやり遂げなければいけないので、もちろん相談しながらですけど、そういう部分が成長につながっているのかなと思います。ほんと先生は一つ一つの大きな任務が結構立て続けにあるんですけど、それをこなしていくんですよ。

ただし一人では勿論できないので、周りも巻き込みながらやっているかなければ駄目なので、それが奥尻高校の教員集団の組織がうまくいっているところなのかなと思います。

—おそらく、生徒さんたちも同じ思いでいろんなことに取り組んでらっしゃるんですよね。生徒さんたちにあちこちでインタビューすると、今、校長先生がおっしゃったようなのと同じことを生徒さんの口から聞きます。そういうことがもしかしたら大事な要素かなというふうに思っています。

清水校長…そう思います。

—役割が決まったら、そいつに任せるといってもその人がほかの人と相談しながら、自分の使命感と責任感を持ちながら一歩前へ進んでいくというふうなそういうチャンスになっていくというふうな話だということに聞きました。

報告③

(特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

(2) プログラムの意図と開発過程、内容

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、町立移管、教員間の引き継ぎ、思いを引き継ぐ、高校まで町で過ごす
 意義、コーディネーター、吐きそうな気持ち、地域とのズレ

報告②では、松原聡史教諭、井上壮紀教頭、清水信彦校長の三人に町立移管時に参考にしたモデルについてうかがった。そして、取り組みを通して個々の教師が成長したこと、さらに教師集団が成長したことも紹介していただいた。

続いて、本稿では報告③として、町立に移管した後の奥尻高校が取り組んだ様々なプログラムの意図、開発の過程、具体的な内容を紹介していただいた。

奥尻高校の町おこしワークショップ、Wifiコーナー、まなびづけ、パブリシティなどの取り組みの継承について語って貰った。松原教諭は取り組みを継承していくことは重要であり、また、簡単ではないと考えている。奥尻高校では若い教員が多くて、入れ替わりが多いので、

「五年後にはもう全部変わってるぐらいの感じ」で教員が変わるといふ。「地元のものつながり、地元についての知識を継承する必要がある。また、ただ要綱だけを引き継いで、紙だけ引き継いでいってもなかなか難しいので、そのスピリットをどう受け継いでいくかということを中心に「かけている」といふ。そのためには、「くっ付いてもらって、グループの中に入ってもらって」というようなことをしている。

奥尻高校はコーディネーターを置いていない。コーディネーターを置くことについては、「学校コーディネーターももちろんあるだが、学校でみんなやるっていうのも全然ありなのかな」と考えられているとのことであった。置かないことで教員が地域とのつながりを深め、そして教師としての成長があるという。教員が、一番最初に町の人に



挨拶しに行った時とかは、「正直吐きそうなくらい緊張する」ということである。また、自分の提案が否定されて落ち込むこともあるという。「これが経験できると教員としてすぐ価値あると思う」との語りがあった。

地域との協働については、「町の人は、発表会の時に）自分の生徒みたいになってます、…一緒にやってきたんだから恥ずかしい格好しないでみたいな感じになってます。」という。松原教諭は、地域住民は、生徒たちと一緒に作っていくんだという感じで捉えてくれていると見ている。

1 町おこしワークショップ

—町おこしワークショップを開始されたのは？

井上教頭…一六年とかです。

—二〇一六年、平成二八年。

井上教頭…町立化した年から始めたんですけど、最初は昼休み。一〇分お話を聞いて、次の一〇分ワークショップしてだったんですけど、次の年は七時間目に。

松原教諭…水曜日七時間目。

井上教頭…水曜日だけ七時間目で、一時間の中で話を聞いてワークショップ。

松原教諭…まとめて発表。

——一時間の中で話を聞いて、

井上教頭…前半、課題を話していただいて、後半でその課題について解決策を子どもたちが考えるっていうふうな。それを前期にやって、後期はもう一回それを、もう一回考えて整理しようっていうので、一年間の間で同じ課題について二回。ひと通りやったあとに、グループ分けをして、僕たちのグループはこの課題についてもうちよつと掘り下げますっていうのを後半にやりますね。で、三年目は、

松原教諭…年間通して。

井上教頭…年間通してグループ分けして、自分たちの専門の課題について一年かけて。一年って言っても、去年は一五回ぐらいだったかな。

松原教諭…そうですね。後半の方に九月、一〇月あたりからスタートして。

井上教頭…で、解決策を提案します。

——そして今年のやりかたは？

松原教諭…今年は、「去年作った企画を実際にやろう」が半分で、「また新たに課題に対する企画を作ろう」が半分ですね。半分ずつですね。半分は実行部隊で、半分は新企画っていう形ですね。その一つが、そのお祭りのゲームになったのかな。足つぼ。

清水校長…縄跳び足つぼリレーです。

——すごい過酷な(笑)。

清水校長…健康がキーワード。高校生が優勝したと聞きました。

松原教諭…そうなんですか。自分たちで考えて、自分たちで持ってた。

清水校長…優勝してしまった感じですかね。

——去年とか今年で言うと、町おこしワークショップっていうのは、どのぐらいの頻度で？

松原教諭…年間二回ですね。時間的には二回から三回で。一月に一、二回ある程度で。

——一回あたりの時間が？

松原教諭：一時間で。全部で二二時間しか取っていないので。

——もう昼休みという体制ではなくなってますか？

松原教諭：そうですね。授業の中で総合的な学習（探究）の時間の時に。

——総合の時間を使って。やっぱり小さな学校だから全学年一斉にできるんでしょうかね？

松原教諭：そうですね。分けても一班六人とかですか。今年はずっと少ないのか。

井上教頭：今年は四人ですかね。何グループ。一七とかあるのかな。

——一七グループぐらい。これは一七人ぐらいの方が来てくださるということですか？

松原教諭：海産物をやるところに四人グループが何グループもあって、そこに町の方が来てくれる形なので、今年は町のほうの分野では七分野ぐらい来てくれるはずですね。場所によっては、海産物とかだと青年部会の人とかをみんな連れてきてくれるので、五人とか六人で来てくれるところもあるし、一人で来ていただいているところもあるので、トータルは何人が把握してないんですが、七分野ぐらいの専門家が来てくださって、いろいろと話を。



— すごいですね。昼間の働いてる時間っていいことですよ？

松原教諭…そうです。

清水校長…町の方がすごく協力的で、ほんとに申し訳ありませんという感じなんですが、学校に対して本当に協力的な方が多いんです。

— 各分野から月に一回か二回誰かが来てくれる。

松原教諭…専門の方が来てくださるのは、年間で三回か四回だと思いますね。毎回ではなくて。最初と中間報告と、あと時間ある時と、最終報告に来てもらう形ですね。

— それ以外の時には、

松原教諭…聞きたいことあったら電話してみたり、来てくれたりっていい。やっぱり町の方はすごくそういうことに協力してくださるので、電話して「こんな質問あるんですけど」って言ったら「今行くわ」って言うってくれる人がいたり、結構そのフットワークはやっぱ島ならではだなどと思います。すごく軽いです。「仕事帰りにちょっと寄るね」みたいなのもよくあるので。

— すごく興味深いんですけども、イメージとしては四人一組ぐらいで、研究活動というか、学習活動をする。それで年度の最初と最後。あるいは真ん中ぐらいは専門分野ということで、七分野の人が来てく

れる。それ以外の時には、その四人一組で生徒たちが勉強会ふうなことを行っている形ですか？

松原教諭…そうですね。自由に放課後残って、ワイワイやって。例えば一昨日に「なべつる祭」っていう奥尻の最後の祭りがあったんですけど、その一つのイベントをこれで作ったんですよ。グループの子たちが。で、それを実際やるためにやりたいんですけどって観光協会の方にお願ひして、お祭りの二日ぐらい前に観光協会の方が学校に来てくださって、打ち合わせしてたりしたので、でもそれは別に全校生徒でやるとかではなくて、放課後の時間使って話してみたいな感じで。

— そういう四人一組ぐらいのグループで。

松原教諭…そうですね。

— じゃあ、ある意味生徒が町の人たちを呼び出すわけですね。電話で。松原教諭…そうですね。そんな感じになってるんですけど。そういう意味ではちょっと面白いかもしれない。

— 町の学校という意識は根付いている感じですね。すばらしいですね。それでは今後の計画あるいは、今後どういう課題を解決していきたいというか、今後のことはどう思っているんでしょうか？

2 Wifi ニーネー

——具体的にどんなことをなさってるか、現状を教えてください。どんな取り組みをなさってますでしょうか？ 進路指導からでいいです。

松原教諭…進路だと町おこしワークショップをやって、進路は結構いろんなこと。町おこしワークショップや「まなびづけ」という勉強会やったり、Wifi ニーネーっていうのは、うちは島根県さんのように大学生が直接来るっていうことはすごく難しいので、でもやっぱり僕たちの進路が考えてたのは、大学には行ってほしいなっていうことで、やっぱり大学生と関わる機会をついてという意味でスカイプで大学生と毎週一回面談をするやつをやって、それがWifi ニーネーっていう感じですかね。手帳もやったり、思い付くのやってみましたね。

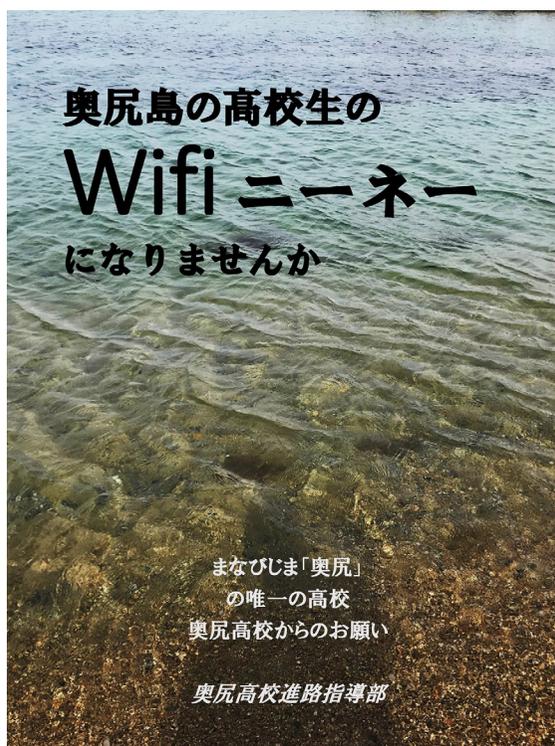
——ニーネーと言つのはどういうネーミングなんでしょう。

松原教諭…兄ちゃん、姉ちゃんです。Wifi でつながるお兄さんお姉さんです。

清水校長…私も一番最初に教頭先生に聞きました。ニーネーって何？と。

松原教諭…やっぱりみんな気になる。

——そうですね(笑)。



実は先ほど校長先生から概要を伺って、こういう方法があったのかと感動しました。学校内だけで行い、とくにアカウントを交換するわけでもないでSNSの安全安心問題はオーケーでしょうし、大学生集めてもう片方で高校生全員を集めて両者をつなごうとするとこれはもう授業時間が合わないの、ほぼ無理です。個人と個人でつながり、しかも個人的にアカウントを交換しなくても済むというのが、すごいと思えました。

松原教諭…結構おススメです。しかも二年目、三年目だと生徒に全部任せるので。一年目は結構わからないので、僕の方で「何時ね」っていうのを常に把握というか一緒に決めて、メールしてって中間に僕がいて、大学生がいて、生徒がいるっていうこういう動きをずっとしてたんですけど、二年目からはもう終わる時に、「来週の何時でお願いします」ってやって、それをただホワイトボードに書いて、緊急でできなくなったら時だけ僕がメールするみたいな感じでやると結構生徒は自分でかなり把握しながらやって、面白いなと思いました。

もう完全に自走してるので、最初につなげるのと、たまに面談するのっていうぐらいで、それはあまり負担にならずに、生徒は楽しいみたいです。

3 まなびづけ

—そのほかはどんな取り組みがありますでしょうか。

松原教諭…あとは「まなびづけ」っていうのは、勉強する環境を作ろうっ

ていうことで、泊まらなければ一日一二時間の勉強時間と、泊まるのであれば最大二泊三日で、ひたすら朝から晩まで勉強するっていうのもやってますね。

—これは自習ですか？

松原教諭…そうですね。自習です。場所はいろいろと学校だけじゃなくて、町の海洋研修センターとか、町立化したので、町の施設を借りるのがすごく簡単なんですよね。教育委員会に電話したら「いいよ」みたいな感じで言ってくれるので。なので、そういうところ借りたり、議会の二階がちょっとリーススペースで使わせてもらえるのでそこでやったり、いろんなところで。青苗地区っていうところの支所を借りたり、とにかく勉強する時間をぐっと一回、引き上げるっていう活動ですね。

4 パブリシティーUターン、Sターン、

関係人口になってもらうために

—UターンあるいはSターン。さらには関係人口という考え方もあるかもしれませんが、そういった将来的な定住者、あるいは関係人口者になるために高校時代にどんなことを生徒に学んでほしい、伝えておきたいというふうにお考えでしょうか。

松原教諭…町おこしワークショップともう一個パブリシティっていう



のもやってるんですが、それが一番その考えにぴったりなのかなと思うんです。やっぱり自分が今生きているところの課題を考えてもらおうっていう。で、その考えた課題を伝えるっていうのが一番かなと。それは多分どこの町に行ってもやれることなので、それをとにかく高校のうちにやらせようっていうふうにすごく思ってますね。そのやらせ方を一人ではなくて、仲間と一緒にやらせようっていう。そして、奥尻高校はさらにそこにプラスアルファしてるのが、同じ学年だけじゃなくて、縦割りでやらせるっていうのは、もう基本にしますね。社会人になったら同年代とやることはほぼないので、他学年とどれだけ距離感を作りながらやってくかかっていうのは。

なので、うちのイベントは縦割りはすごく多い気がします。

——このパブリシティっていうのは具体的にどんなことを？

松原教諭…パブリシティは町の例えばメインは人口減少に対するアプローチが多いんですけど、町に対して、政策提言っていうことで町長に直接お願いする、提案するっていう活動ですね。町長さんに。人口減少止めるために僕たちこんなことを考えたんですけどかかっていう。今年はこちらと人口ではないんですけど。

——この縦割りで行うことの効果とというのはどういうふうに実感されていますか？

松原教諭…まず、組織力的にうちの全校生徒は六二人いるんですけど、それで一つつという動き方ができるようになるので、小さい学校だか

らつてというのが少しでも多くはなるのかなつてというのが、まず一つですよね。これ縦割りにしないと、各学年で最大の組織が三〇人つていう組織が三つあるだけになっちゃうんですけど、全校生徒でギュッとできるので、何かイベントやる時に動きはいいのかなつていうことと、あとは何してもやっぱり先輩後輩がすくつくつながりが多い。

他の学校の生徒たちは奥尻高校の生徒が羨ましいみたいです。島外に行った生徒とかもたまに帰ってくるので、そういう子が話すと先輩と関わることって部活ぐらいいかないんだけどつていうのはよくあるみたいで、うちはそこは日常的にあるので、羨ましがられるつていうことです。

あとは、先輩がいるつていうことは、常に昨年度のもの、経験として降りてくるので、クオリティーは上がるなとは思つてます、私的には。

またゼロからスタートではなくて、昨年のお土産を持つてのスタートなので、毎年クオリティーが自然と上がるつていう。

教員がしゃしゃることなく、クオリティーが上がるつていう感じですよ。

——例えば二年生が一年生の教室に行くとかそういうことがありですか？

松原教諭…ありますね。

——その逆も含めて。



松原教諭…はい。全学年そういう形です。

—そうですか。そうすると普段からかなりつながっている。

松原教諭…そうですね。

—縦割りをすることによって、つながりが深くなるし、深くなることによって、また縦割りがしやすくなってくることがある。

松原教諭…まず、入学してすぐに先ほど言ったピアサポートっていうので、先輩と後輩をマッチングさせて、一時間学校の好きなどでしゃべってきいて言っていて、このへんを全校生徒が入ってきたばかりの一年生と先輩が二人で歩きながら話したり、座って「こんな高校なんだよ」っていうのをまずスタートでやってっていうのがすごく大きいと思います。

で、そのマッチングでつながった二人が町おこしワークショップで同じグループになったりっていうのがあるので、話しやすくして、話し聞かせてもらうとか。あとは、「まなびづけ」は計画を立てる時とかがあるんですけど、勉強の二時間計画を立てる時は、その先輩がチェックします。一年生がとんちんかんなこと書いてて、これはちよつと全然間に合わないよ。これじゃとかかっていうのを先輩にチェックしてもらって、「まなびづけ」の勉強会に行くとかっていうのもあるので、比較的教員がなるべく出なくて済むようになるかなと。部活でやってることを学校でやる感じですかね。

5 教員間の引き継ぎ

—それでは、ご苦労されている点について。

井上教頭…そうですね。引継ぎがやっぱり難しいなって思っています。今は。

—教員間の引き継ぎ？

井上教頭…若い教員が多くて、入れ替わりが割と早いので、五年後にはもう全部変わってるぐらいの感じで教員が変わるので、新しく来た先生方に今までやってきたことを引き継いでいかなければいけないんですけど、そこがちよつと難しさを感じるところかなと思います。

—教頭先生的には、そういう時にはどのような工夫というか配慮をされるんですか？

井上教頭…今年それ課題だよねっていうところで、去年から言ってきたことなんです。いろんなことやってるんですけど、一つ一つがどういう背景で始まったのかとか、どういう精神でやってるのかっていうようなことを伝えていかないと、ただ要綱だけを引き継いで、紙だけ引き継いでつてもなかなか難しいので、そのスピリットをどう受け継いでいくかっていうところが課題だねっていうことで、当初はそれをスライドとかにまとめたり、動画にまとめたりして引き継いでいくのがいいんじゃないかっていうことで話はしてんですけど、なかなかそ

ここまで手が回ってなくて、ちょっとできてない状況です。

——地元の方とのつながりとか、地元についての知識とかそういういったものは先生方はどうやって、どこから学んでいくんでしょうか。

松原教諭…町おこしワークショップの一番最初の時に、町どうやってつながるかという時に、まず島の人に学校に来てもらおうということで、たくさんの人に来てもらって、昼休み一〇分ぐらい話をしてもらって一〇人ぐらい来ていただいてやったんです。それを教員も全員でやったので、先生方も一緒に話を聞くついでという中で、町の課題であるとか、どんな人がどんなふうに関わっているのかっていうようなことが少しずつわかってきてですね。

二年目はワークショップはメンター、アドバイザーみたいな感じで。

井上教頭…そうですね。くつついてもらって、グループの中に入ってもらってですね。

清水校長…島の課題は多くて、人口減少と消滅可能性都市第四位というの、やはり改善・解決すべき課題がたくさんあるということなので、そこはまず島として、島の一員として学校で課題解決策を探っていきたいと考えています。

あと学校の今後の計画としては、やはり先ほど教頭先生からあったんですけど、この取り組みの意義を引き継いで持続させていくことが課題ですね。

データだけではなくて、思いを引き継ぐというところはかなり大事

になってくるのかなと思います。

6 中卒で島を出ると

島のことから分らないままになる

松原教諭…あと生徒をもうちょっと増やせたらまた面白い。外国人がもうちょっと増えたら僕は面白いなと個人的に思っております。あと来年も花火を上げられたら。

——花火ってどこ行っても話題になりますね。結構インパクトがあるんですかね？

松原教諭…そうですね。ちょっと今年は花火上げられたので。来年も。

清水校長…来年は海洋研修センターの裏の海であげたら良いかもしれないね。

松原教諭…そうですね。お金をどっから捻出するかを考えなければいけない。

井上教頭…奥尻の地元の中学生が、函館とか札幌とかに出で行ってしまっ子がいるんですけど、それはそれでいいんですけど、奥尻高校に来て、地元のことを学んでから、いろんな課題を持った上で進学して、



島のために何かできないかっていう視点で勉強して、どこかで還元してくれるような、あるいは戻ってきて起業するとかっていうような子が出てきてくれるといいのかなと。それを町も期待してるのではないかなと思うんですけども。中卒で出ちゃうとやっぱり島のことはそんなに知らない。自分のイメージだけで、こんな島はもう嫌だみたいな感じで出て行く子もいるでしょうし。でもいろいろ見てみるといろんな魅力もあってというのをわかった上で、島から出て行くっていうステップになればいいのかなと思います。

——中学校から奥尻高校への進学者数を見ますと、率で七割ぐらいですか。七割から八割ぐらい。それ以外の島の中学卒業生は、本土の高校に行ってる可能性があるわけですか？

清水校長…そうですね。函館、札幌に進学する生徒が多いかなと。

——毎年数名いらつしゃいますよね。確かに高校をここで過ごさなかったら、故郷のイメージちよつと先ほどの話じゃないですけど、ネガティブなイメージを持ってしまいかもしれない。

松原教諭…前、奥尻高校に入学して来てた子は、ほんとに函館行きたいんだけど行けないからっていう子が多かったと思う。今来てる子たちはそうではない子が。奥尻高校でいろいろ学びたいって思ってる子が増えてきているのかなっていうふうには。

——うれしいですね。それ。生徒さんの意識。また午後インタビュー

させていただけたらと思うんですけども、意識の中では高校の存続ということには特に意識にはのぼらない。町立化することによって。

松原教諭：そうですね。そこも特にないかなど。

——そうすると生徒さんとしては、高校存続よりも島を活性化させたという意識で取り組んでいるという。わかりました。それでは最後になりますけど、その他ということ、何か先生方の視点でこの学校の取り組みについて思っていること、考えていらっしゃることをお話し下さい。

7 コーディネーター

松原教諭：そうですね。広島県とか、島根県とかのコーディネーターさんがいる学校とは違つてうちはいないので、その役割を教員がやつてるんですけど、それはすごく僕はポジティブに思ってます。それを大変だつてきつと知らない方は思うと思うんですけど、僕は結構その町おこしワークショップの一番最初の町の人に挨拶に行った時とかは、正直吐きそうなくらい緊張してたんですけど、それがなければ僕たちは六〇歳定年まで自分の好きな教科を教えて終われるんですよ。

それが吐きそうになりながら、資料持つてその人のところ行つて、「すみません。休みの日」、それこそさっき言った「お昼の時間に来てもらえませんか」って頭を下げに行かなければいけないんですけど、結局でもそのときにお付き合いさせていただいた方たちが今でもいろんなところで助けてくださるので、そういう意味では、これが経験できる



と僕は教員としてすごく価値ある学校だと思いますね。結局、いろんな人がほんとにそこで、異動した方も、たまたまそこに出張に行った時には、「松原くん、来るのだったらちよつと顔出しなよ」とか言ってくださるんです。

松原教諭…それがほんとに教員にとつてもすごいことだな。もちろんコーディネーターさんがいた方が、やっぱり人脈は計り知れないので、呼べる方は多かつたりするのかとは思ってますけど、ただ地元のつながりという面では、僕たちはここに暮らして、ここで今生きてるので、地元の課題もやつぱりひしひしと感るので、そこは負けないところかなと。そういう意味では、この形も結構ありだなと思ってます。今、日本で大きな流れになつてる学校コーディネーターさんっていうのももちろんありますけど、学校でみんなやるっていうのも全然ありなのかなと。

——コーディネーターを導入したとしても先生方は地域としつかりと吐きそうになりながらも関わったほうがいいのでしょうかね。

松原教諭…教育委員会とかもやつぱり顔出す機会はずっと増えてくるので、それは町立のおかげなのかなと。

——その吐きそうな気持ちよくわかりますよ。私も吐きそうな気持ちになりながら、町のいろんな人に会ってきたりして。

松原教諭…緊張しちゃいますね。やつぱり(笑)。

——しますよね(笑)。

松原教諭…最初、iPadで説明しようと思つて、持つていったんですけど、前日緊張しすぎていっぱい練習したら、当日電池なくなつて持つていっただけで、「iPadあるぞつて自慢してきたのか」つて言われるし、「いやいや、そんなことないんですけど」とか言いながら……。つていうとんちんかんなこといっぱいしてました。やつぱり教員やつてると、学校にずつといれば冷静に断られることつてあんまりないんですよ。対大人に。

「いや、それは無理だよ」つて言われることつてあるじゃないですか。お願いしに行くけど、でも、教員だけやつてると、そういうことつてあんまりなくて、それに対する耐性がすごくないんだつてこの学校ですごく感じました。冷静に「それは無理だ。そんなことしてられないよ」つて言われることももちろんあるので、「そうだよな」と思いながら。だからそういう意味ではすごく面白いですね。それ本来はそういう力こそ子どもたちに必要な力ですよ。子どもたちはほとんど教員にはならないので。そういう意味では進路の時。そういうこともあつたよとかつていう話ができるつていう意味では、よりキャリア教育の方にはプラスになるような経験ができてくるのかなと。

——あと、地域との協働をしていて、難しいなと思つて点がいくつかあるんですけど、そのうちの一つは、地域の方は学校がすべて上手にお膳立てして、それから生徒が来てるもんだというふうを考える場合があるとつて思ってます。そこでちよつと学校と地元の人との間で溝ができて

うことが無きにしもあらずなんですけど、こちらではその問題はどうかになってますでしょうか？

松原教諭…説明がそもそも違ったりするんですかね？

清水校長…そうかもしれないですね。

松原教諭…この町おこしワークショップはほんとにどんな感じでやってるんだろう。お膳立てっていうのは、ちゃんと、

井上教頭…事前にちゃんと形を整えてから行くのでお願いしますみたいな。

——地元の人は手伝うんだと。自分たちは手伝うんだから、高校は簡単に手伝える状態にしとかなきゃいけないのに、こんなこともまだ生徒ができないのかとか。

松原教諭…どうなんでしょう。自分の生徒みたいになってます、町の方は一緒にやってきたんだから恥ずかしい格好しないでみたいな感じになってます。それは、教員はほんとに町おこしワークショップは、教員は廊下にいるというのが、僕のすごく理想的な形だと思ってて、教員はなるべく当日は、町の方が来た時は、話に入らないでくださいという話をしてるんですけど、そういう意味では、町の方々も自分の生徒みたいな感じになってます。もちろんできない、準備不足の子たちもいるんですけど、「それじゃ駄目だ」とかという感じでやってくれ

てますね。なので発表会の時とかは、町の方同士がうちのグループの方がいい発表させてやるみたいな感じになってて、結構観てて面白いですね。それで、終わったあととかは、「うちが一番良かったぞ」みたいなのは、どこのグループでも言ってるので、そういう感じですかね。スタートは決して高いレベルではやっぱりない。

清水校長…そこは理解してくれてると思います。町の方々は、生徒たちと一緒に作っていくんだという感じで捉えてくれていると思うので、多分、最初のこの取り組みについての説明がうまくいってるんだと思います。今、学校に来てくださってる方々は、今年で三年目となります。

松原教諭…はい。びつくりしてますね。今、どんどん良くなってるねって。最初の時の生徒と全然変わってきたねって。

報告④

(特集)各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

(3) 奥尻高校の根底にある考え方

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、町立移管、小さいという柔軟さ、過剰投資、ないもの探し、あるもの探し、ありあわせ、地域の生態系、人交密度、地域の特色を生かした教育

松原聡史教諭、井上壮紀教頭、清水信彦校長に対するインタビュー後の雑談の中で奥尻高校の取り組みの根底にある考え方について興味深いことが話されたので紹介させていただきたい。

1 小さいという柔軟さ

松原教諭：今、こういう学校って結構増えてきていると思うんですけど、これどんどんやっぱり増えていきますかね？ どうなんでしょう？

——まず、統廃合の危機にある学校は、間違いなく増えていくと思います。この一〇年ほどで、およそ六〇〇校がなくなっていますし、同じような傾向が続く可能性があります。そんな中で、高校がなくなる

ていうことは、地元にとってはすごく大きなことですし、先生方の中でも高校がなくなっても自分は次に行けばいいやというのとはちよつと違うという意識が広がっているように思います。

高校の募集対策では、進学実績を高めることで入学者を増やす。あるいは、部活動を活発にすることで入学者を増やすというのが、長い間考えられていたと思うんですけども、その考え方だとちよつと無理だというふうに捉えている高校が増えていきます。

そのような中で、地域の大人と一緒に地域の活性化を勉強するという方法での高校魅力化が広がっています。今後もそういった魅力化の高校が益々増えてくんだらうと思います。奥尻高校の場合は、町との関係が深まっています。深める方法は、いい意味でアバウトになさっているところがあるような気がします。年間計画をビシッと決めて



そのとおりにやろうとしたら多分うまくいかなくなると思います。そういう意味では従来型の学校運営の発想とは異なる発想だと思います。こういう学校が増えてきているか、ということですが、奥尻高校と同じような高校は増えつつありますし、もっと増えるんだろうと予想しています。

松原教諭：僕、この魅力化ということとか、この地元じゃない子たちをここに入れるっていうことが、島にとってはすごく僕は一番の策かなと思っています。地元の子はほんとに故郷を作ったりということがいいなと思ってやってるんですけど、島外が出身の子も島に居る間に今住んでるこの町の課題を感じて、第二の故郷を作っています。これのデメリットというか、これによって起こるマイナス面っていうものはあるんだろうかってよく考えることがあって、そこも把握しながらやらないと長続きしないのかなと思うんですよね。流行りでやってしまうと。そういうデメリットってこういうのって何かやっぱあるものなんですか？

——デメリットについては聞いたことがないです。ただ、進学実績とか部活動の実績で学校を存続させようとして、そのためにエネルギーを消耗するとか、寮を作るとかの初期投資、あるいは年間の経費が高くなってしまったりと学校経営が苦しくなってしまうと思います。そういう意味では進学実績と部活動（の面での魅力化）の競争にはあまり投資しないほうがいいだろうと思っています。

奥尻高校は、先ほどの校長先生の話の中にも何回か出てきてると思いますし、松原先生の話の中にも出てると思うんですけども、小さい

町、小さい学校という資源があります。このことの価値に気付いていて、そこからスタートしようとしています。これは、都市部の大規模進学校と比較して無いものなだけで、大学進学のための何かを引つ張ってくるとかしてしまふよりも、小さいことの良さを有効に活用するという方法であり、奥尻高校のやり方にとっては正解だと思います。

それができるといふのは、きつと町の中に補助金に頼って生き残ろうとか、無いものがあるからここはもう駄目なんだと諦めるんじゃないかと、町の中にあるものを活用していこう、利用していこうという考え方が既にある程度広がってるからではないかというふうに思いました。

それなので、そうした町の流れを活用して、なお且つ小さい学校ならではの良さや、ここはずっとスキューバダイビングもなさってるようですけども、それらの資源を活用して、高校魅力化を続けていかれるのであれば、そんなに失敗することはないと思います。最大のデメリットはコストがかかりすぎてしまうということですから、それがないのであれば問題ないというふうに思います。

2 あり合わせ料理(アバウトさ)の強み

松原教諭…先生から見ると、奥尻高校のいいなって、一番いいなって思ったのは何ですか？ 僕たち中にもいるので、どれがほかの人にとって、これはいいなって思うことなのかって正直、しつくり来てなくて、奥尻高校のここが一番いいよなって感じたところってなんですか？

——今一番感じてるのは、やっぱりこれも先ほど話しましたけども、

フットワークが軽いということ。あるいは、ネガティブな思考に陥らないということ。町の方々、それから先生方のいい意味でのアバウトさなというふうに感じます。もしどなたかがすごく生真面目な方で、PDC A サイクルがきっちりできてないじゃないか、みたいなことを言い出したら、こなすものになってしまふし、そもそも新しい取り組みは当初計画通りに達成することはできないんですよ。

新規事業立ち上げの研究で言われていることは、あり合わせ料理が大事だということです。あり合わせ料理を作っていく中で、目的が徐々に明確化してくるということです。もちろん大きな旗印は必要ですが、最初から明確な目標があつて、それでそれに必要な資源を計画的に導入しようというのは、これはもう嫌になっちゃうだけ。

松原教諭…島では無理なパターンですね。確かに。

——そういうふうにあります。なので、アバウトさがいい方向に動いてるな。そして、あり合わせの素材・資源としての、小回りがきいたり、仲がよかったり、子どもたちの成長を見るのが楽しかったり、子どもたちの成長に関われるのが楽しかったり、というのが、この学校のいいところなんだろうと思います。

松原教諭…ありがとうございます。最後にめちゃくちゃ気持ち良かったです。

清水校長…最大限の褒め言葉をありがとうございます。



松原教諭…ありがとうございます。すいません。

井上教頭…頑張ろう。

松原教諭…そうですね。

—あちこちで奥尻高校の取り組みを宣伝させていただきますので。

清水校長…ありがとうございます。全国にこういう学校が増えたらいいのになと思つてます。

—そうですね。

清水校長…この企画をやるということではなくて、その町、その町に必要なものを作り出していくことが大切で。大きい学校がやっているからやった方がいいよではなくて、この町に必要なことは何だろうというのをどんどん作っていったら良いと思います。きつと生徒たちが、こういうことを勉強したいから、あの学校に行くんだとか、地元で勉強したいからうちの学校に来るんだとなると、それがダイバーシティという言葉につながっていくのかなと思います。いろんな考え方があると思いますが、もっともつと広がっていけば良いと思います。

—そこ大事だと感じています。隠岐島前高校さんを例にすると、最初のころは他校のモデルとしての使い勝手が良かったと思うんですけども、今はかなり特色を明確に出してきているので、あそこの地域の

あの学校にとっての一つの完成形に近づいた形になってきています。だから、他の地域の他の高校が隠岐島前さんと同じようなことやったらこれは地域の生態系を崩してしまつと思ひます。

清水校長…そうですね。ほんとにそうだと思います。

松原教諭…きつとそうやってやったら全国どの学校も違うことやるよになるんですかね？方向性は一緒だとしても。絶対町の課題って違いますよね？

清水校長…それぞれで違う課題があるので、そこに合ったやり方で進めた方が良いでしょうね。

松原教諭…空気も違うのと同じように。そっちの方が面白いんだろうな。

井上教頭…うちは割と地域の方々も積極的にきてくれて、できてますけど、そうじゃない地域はそうじゃないの何かやり方を考えていかなきゃいけないでしょうから。枠組み自体もいろんなことが考えられるんだと思うんですけど。

3 人口密度が高くなること、人材が集約されること

松原教諭…札幌市とかまた違う課題がきつとあるんだろうな。島留学みたいなことをやると、例えば東京から流出するじゃないですか。その町はどうなるんですかね？ どうなるんでしょう。僕はいつもそれ

も考えてます。減つても全員がいなくなることはないですけど、志高の子がどんどんもし地方に行つたら、日本の中心部は崩れてくことはないのかなとかつていうのを考えてたりするんですけど、そういうことはないんですか？

—日本の産業全体がどうなるかと、日本の経済全体がどうなるかつていうのはこれまた一つ難しい話に入り込んでしまつと思ひますけども、労働集約型でずつとやってきていて、日本は人口密度が高いということが非常にメリットになってきた国だと思ひます。その場合、これまでは人の口の密度の人口密度だったんですけども、今後課題となるのは、人の交わりの密度の人口密度を高くすることになると思ひます。人口密度を高くしてつていくことによって、暮らしやすいし、そして活発になるといふふうな話だと思ひます。

井上教頭…面白いですね。確かに。ただ、よくわかんない人たちがいっぱいいればいいではなくて、つながつてる人がどれだけ集まるかという感じですか？

—つながれないと駄目です。朝から校長先生の話をうかがつて素晴らしいと思つたのは、奥尻高校では生徒だけでなく先生も、先生と町民もつながりが深くなつたつていうことでした。やつぱり熱い思いを持ってつながら、一歩前へ進めるような人たち。そういう人たちがたくさんいるということが、島にとつても、それから日本全体にとつても大事なんだろうと考へてます。

松原教諭：そういうことですか。

——もう一つ付け加えると、奥尻高校でなさってるようなことを中学、高校時代にやって、その上で大学に進学して、そしてグローバルカンパニーで働いたとしても、高校時代に地域を大事にするような生活をしていた場合には、これは私の期待なんですけども、地元に戻らずに国際企業に勤めたとしても、人を大事にしたり、地域を大事にした働き方をしてくれるんじゃないかなというふうに信じたい。これはもう全然根拠ないんですけども、信じたいなと思ってます。

松原教諭：そのとき踏みしめてる土地を大切に人が増えたらいいですよ。

4 公立高校の強味としての高校魅力化

——全くそう思います。人によって違うんでしょうけども、中学校まではあまり考えずに、地元が好きだなとか、地元の雰囲気がかうだなというふうに思ったり感じたりします。高校時代になって、思考や行動の対象として地域とか、地域で生きてきた自分を捉えることが比較できるようなと思います。その時代をこの島で過ごしておく。あるいは、人が人を大事にするような地域で過ごしておくというのがとっても価値があるだろうと思っています。

清水校長：いろんな学校が出てきたらいいなと思います。これからの高校教育でどの学校も特色ある教育を進めなさいと言われていて、一

番進めにくいのが都市部の大規模校の普通科の高校かなど。文科省の方から普通科の魅力化を進めなさい、でも実際に大規模校ではなかなか小回りが効かないので、難しいところもあるのかなと思います。うちは小回りが効くのでいいんですけど、やっぱり大規模な学校で近くに似たような学校が存在している高校では、何を特色に打ち出すかというのは大きな課題だと思います。

——そういうことですよ。社会に開かれた教育課程ですからね。

清水校長：社会に開かれた教育課程の実現に向けて、どの学校も考えている状態ですね。

松原教諭：特色を作ろうとかつてなっちゃうと難しいですよ。その特色という言葉がすごく難しいですよ。隣と違わなきゃいけないみたいなものってなかなか難しいですよ。

——都市の場合は、私立高校がいろんな形でそれをしようとしていますよね。まさに特色を出さないと終わりですから。

松原教諭：そっか。そういう意味では公立は強いんですね。

——でも、これから定員減らしてくとしたり、地方郡部で減らせない分、例えば札幌なんかでも真ん中のほうの学校から統廃合してくだろうと思っんですよ。クラス数減らすのも都心部からですよ。



井上教頭…昔だったら一〇クラスとか八クラスとかだったのが、もう六とか四とかですもんね。

— 驚くほど少なくなつちやいますよね。

松原教諭…そうですね。おつきい方がやりやすいんですか？ やっぱり。どうなんですか？ 僕大きい学校って行ったことがなくて。

5 都市大規模校と地方小規模校

松原教諭…例えば八クラスとかあるのと、四クラスだったら働いてる人、教育のしやすさというかは、やっぱり多い方が、

清水校長…大きい学校は、教員も多いよね。その分、質の高い教育はできるかもしれない。教科や受験指導なんかも含めて、小規模校だったら数学や教科担当が一名しかないとか、教科の部分では展開授業など大きな学校ではたくさんできるとか。

井上教頭…選択科目とかも数学だけで六人も八人もいたらいろんなことができる。というのはあるけども、逆に何かやるってなってもどうか。

松原教諭…そうか。そういうことなんですよ。逆にそこさえ把握できれば勝負は全然できるんですね。



井上教頭…うん。できると思う。

松原教諭…スタディーサプリを使ったり、AI使ったりして、教えるところ、というところに特化するものをうまく取り入れたら、その負けないんですね。

井上教頭…大規模校よりはちよつと厳しいなと思うのは、部活動、受験指導のいろいろな部分でやや弱いかもしいけれど、逆に小規模だから個別に対応できる部分はあると思うから。

松原教諭…そういうことか。

— 都市の大規模校は、周りに予備校がいっぱいあるので、進学指導はある意味任せざるを得ないですね。そっちに。

松原教諭…専門家がいますね。

— 情報量全然違いますから。あと、私なら絶対に八クラスとか一〇クラスあるようなところの教務主任はやりたくないです。時間割作るだけで大変です。

松原教諭…そう考えるとやっぱり面白いですね。

— 小さな高校だと、何か必要だったことになったら、じゃあその時間来週使おうとか言って、全校的にできるわけですよね。

松原教諭…暮らしたりするのも都市部の方がやっぱりいいんですかね？
僕はもう五年間いるので、奥尻の生活がとて良いですけど、やっぱり都市部の方が便利なのかな。そう考えるとやっぱりいろんなことが考えられるな。

清水校長…大学とか企業とかいろいろな連携を組んで取り組みたいと言ったら、例えば札幌とか都市部に行ったら、近くにあるからね。例えば奥尻だったら日程決めて年に一、二回しか来てくれないところを、例えば上手く活用すれば月一回とか関わる方法もとれるかもしれないね。

松原教諭…できちゃう。

清水校長…大学や企業の方に来てもらうだけでなく、生徒を大学に連れて行くということも可能だけど、うちはやっぱり移動という大きな壁があるのでそこがすごく課題だね。都市部には近くに大学や企業があるので、実は取り組みやすい環境が大きな学校にはあるかもしれない。

松原教諭…そうか。すぐそこに大学があるんですね。

井上教頭…意外とすぐそこにあるけど、あんまり連携してるところもそんなんでもないのかなっていう。

清水校長…例えば函館の高校にいた時には、市内にある未来大学や教育大学行って学習をしたり、総合的な学習（探究）の時間に講師として招いたり、夏休みには地域探究学習と言って、生徒が事業所に行つて体験学習をする取り組みもしていましたね。そこには先生方が付かずに、大学や企業であったり、地域の方々から教わる、そんな取り組みをして、終わった後にレポートを書いて単位にするような取り組みをしていましたね。

松原教諭…すごい。面白い。

清水校長…ただ近くに大学がなくても、そういう取り組みは奥尻高校ならではの取り組みとして、考えたらICTを活用した遠隔教育や、地域の方に協力してもらえば十分にできそうかなと思つているけどね。

井上教頭…うちは人数少ないからそういう機会が、もしあつたら全員がそれをできるっていうふうになるメリットはあるので。

松原教諭…そうですね。移動面白いですね。移動っていう課題は面白い課題。フェリーで出掛けるだけでも、ちょっと函館に行くだけでも、僕たちはすごく面白いのは、何日も前から波の高さがどうかを確認してとか、でも僕それですごくいいことだと思つてます。自然と生きてつてすぐ人間って忘れるんですけど、僕たちは常に自然と生きてないと生活ができないので、うちの妻とかフェリー波をチェックして、「ちょっと止まりそうだった」って言って食材多めに買うとか、それが当たり前。

うちの子たちも、「おはあちゃんに会いに行きたい」って言うけど、「フェリー止まってるから我慢しよう」ってこんな話、都会では絶対ないですよ。でも、自然と共に人間が生きるってそういうことなので、それはほんとに課題なんですけど、教育の効果はすごく高い。

なので、この島外から来た子たちが帰る計画を立てるのとかは、普通のところ、陸つなぎのところに行ってる子にはあり得ない話ですよ。もう飛行機一カ月前から取ったりして、なのに濃霧で飛ばなくて。そういう意味では、成長ってどういう意味ではすごく課題はやっぱり面白い。

——時間の流れ方が面白いと思ってるんですけども、地方に行くと、正月の食べ物や春から種撒いて植えてくというそういうすごい長期的な計画があると思うと、今日は晴れたから田植えがあるから会えないっていうふうに言われちゃったりとか、すごい長期計画があるかと思うと、目先のことはもう天気任せなんだというそれがすごく面白いと思います。

本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

報告⑤

(特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化(上)

生徒は奥尻島の町立の高校魅力化で夢を実現することを選んだ

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、島留学、コンサマトリー、失敗で高まる経験値、交流による向上心の芽生え、感性を育てる、ネットワーク、二律背反の地域への思い、関係人口

奥尻高校の島外生(県外生)の成長物語には思わず引き寄せられる。島外生が学び取る学力は、人間力や社会人基礎力の要素が特徴的である。

島外生の北野君と海野さんへのインタビューから分かったことは、奥尻高校の教育は学習の基礎基本と応用の両者を同時に含む教育であり、生徒の知識・技能を高める教育と学習可能性や成長可能性を高める教育が一体化して行われていることである。

島外生は学び取る力、つなげる力、変わる力を高めている。それらは人間力や社会人基礎力と呼ばれている学力と同じタイプの学力であった。たとえば北野君は「失敗がその次の経験につながったんじゃないかなって思いますね」と失敗を通して経験値が高まることを学んでいる。海野さんは、「人とのつながりがほんとにたくさんできました、

自分がそれを紹介することもできるし、その人のよさを話すこともできるようになったし。もうほんとに、いろんな能力がでて。人脈も得たし、私がしゃべる力っていうのも、もともとちょっとあったものがもっと大きく」なったという。

島外生の学びは奥尻島の中だけで意味を持ち完結してしまう学びではなく、島外での生活とのつながりをもっている。

奥尻島での生活は、都会で生まれて普通の学校生活を送ってきた島外生にとっては異文化体験であった。インタビューでは奥尻島での学びが戸惑い体験としても語られており、戸惑いがあったという事実からは中学までの体験と奥尻島に來てからの体験の間に分断線があると考えられる。しかし、興味深かったのは、島外生は分断線を感じつつ

同時に意識して分断線を越えようとしていることであつた。北野君は帰省したときに、奥尻で得た視点から東京の友人にアドバイスをしている。海野さんは島外のビジネスパーソンとつながっている。北野君も海野さんも島外と奥尻をつなぐ卒業後の進路を描いている。

北野君と海野さんは、目的を持つて奥尻高校を選んでいる。魅力化の魅力に惑わされて受験したわけではない。北野君は映像の技術を学ぶ前に奥尻の自然で感性を育てることを選んだ。海野さんは、「人前であんまりしゃべりたくないっていうか、緊張したりあがり症もあつて、すぐだめだったんですよ。それを改善したら、とんでもない強みになるんじゃないかっていうのをすごく感じて」奥尻高校を受験した。まぼろしを見て高校を選んだのではないし、偏差値を資料にして進路指導されて高校を選んだのではない。

島外生二人の力が高まった「背景」には、学校内外の親密な人間関係、生徒自身が自発的に発見する学びの必要性、さらにホンモノ感やトキメキ感、ドキドキ感の存在があつた。これらのうち人間関係では、住民・役場職員との協働という親密な関係を築き、北野君は「打ち解けられるみたいな感じで……そういう環境に地元の大都市とかでは恵まれなかった。人と人との温かさっていうか、つながりがもうめっちゃ深く感じ」ていると語り、海野さんは「みんながみんな結構、影響力強いっていう感じで面白いなって、すごい思ってる」と語る。また、海野さんは企画書や報告書の作成を町の人に見てもらっているという。

最後に、近年、学校はコンサマトリー（自己充足的）かインスツル

メンタル（手段的）かという二項対立的な議論がある。進路のための手段的側面が過度に強調されてきた高校教育を批判する意味を含んだ議論である。

北野君と海野さんからは二項対立を越えた学びの様子が見て取れた。長くなるがそのことに触れておきたい。二項対立の議論では、高校のインスツルメンタルの側面で強調されるのは進学・就職のために今の高校生活は忍耐するという考え方である。コンサマトリーの側面で強調されるのは友情や恋愛や消費的若者文化での欲求の即時充足のために高校生活を送るという考え方である。高校生活でそうした二項対立が起きている場合は、生徒はインスツルメンタルをとるかコンサマトリーをとるかで悩むことになる。しかし、北野君と海野さんを見てみると、これまでの二項対立の議論は視野が狭かったと痛感することになる。本来のコンサマトリーは「いまここ」での生活や感覚が充実していること、本来のインスツルメンタルは自己実現やコミュニケーションのための学びを意味していたか、あるいは意味する可能性を含んでいたはずである。

北野君と海野さんは快樂や欲望とは異なる意味で高校生活を楽しんでいる。実際、筆者のインタビュー中は目が輝いていたし、私をしつかり見ていたし、言葉が生き生きしていた。「いまここ」で生き生きとしているという意味でコンサマトリーであつた。同時に、北野君と海野さんは仲間や奥尻島のために頑張っていた。仲間や奥尻島の幸福に役立つことを喜びとしているという意味でインスツルメンタルであつた。北野君と海野さんは自分自身を仲間や奥尻島の成長や活性化の手段にすること（インスツルメンタル）と自分自身が「いまここ」で生き生きすること（コンサマトリー）を同時に実践していた。



高校魅力化にとって大学や就職先は大事だ。しかし、どこの大学や企業に入るかは最優先事項ではない。最も大事なのは自己実現やコミュニケーションの幸福のために大学や企業で何をするかである。北野君と海野さんは人々と島の架け橋になることや島の役に立つことを考えており、そのことを「いまここ」で実践している。このとき、「いまここ」で大事なのは快楽の感覚ではなくて、生き生きとすることだ。従来の二項対立の議論に取り込まれると二項対立を解消することが見失われてしまいがちである。北野君と海野さんは自己実現と地域貢献をするために、「いまここ」の高校生活を生き生きと暮らしていた。

1 参加している高校魅力化の取り組み

北野君も海野さんもやりたいことがいっぱい、やっていることもいっぱい。北野君は、人口が少なくて課題が多い奥尻ではマクロナな視点でものごとが見れるようになるという。海野さんは廃業したホテルの再利用をしたいという想いから出発して、なぜそう思ったかを考えて、実は自分はホテルの廃業とともに廃止されたフェリーの航路を復活させたいのだと気づき、さらに考えてフェリー航路を復活させたいのは島の人のために何かしたいからだというように自分の想いを深め自分が何をしたい人なのか、島の役に立つにはどうしたらいいのかを問い続ける作業をしている。二人にとって課題は与えられるものではなく、問うものであり深めるものであった。

——それでは、順番に質問させていただきます。お名前は何と呼んだらいいですか。北野さんと海野さんでいいですか。

北野宏志：はい。

海野友美：はい、大丈夫です。

——まず、具体的にどんなことをやってるか、教えてください。

北野くんはどんなことをやってますか？

北野：最近だと「町おこしワークショップ」で、自分はエネルギーという課題についてやるんですけど。地熱、奥尻の地熱を使って、奥尻ってやっぱりバスとか、交通手段が三時間に一本とか四時間に一本とか少ないから、「地熱で電動自転車を動かしたりして、今やろう」という企画を考えています。

——すごいですね。この学校は、生徒の考えるスケールが大きいですね。

北野：大きいですね。僕、地元が大都市だったんでわかるんですけど、地元の大都市って人がたくさんいるから、いろんな役職があるじゃないですか。だから、何か役職にあたる時も、結構小さいです、やることの幅が。でも、こっちって人数少ないし、かつ課題もめちゃめちゃ多いから、役職ついたらとんでもない範囲でその課題とか見なきゃいけないじゃないですか。だから、ミクロっていうよりは、結構マク

ロな視点で見れるなっていうのが、ほんとにこっち来て思いました。

——では次に、海野さんにお聞きしましょう。海野さんはどんなことをしてますか。

海野：私は先ほど、北野が話してたんですけど、「町おこしワークショップ」。これは、全校みんな取り組んでいる町おこしのものになっていて、これで私は、農業を担当させていただいています。今、お話を進めながら企画作りなどをやっています。私のグループは、一人一つ企画を作ったりとか、そういった感じで、「質よりも先に量を出して、それを高めていこう」というかたちで企画を立てさせていただいて、今、まだグループ内で、私も提案して話してはいないんですけど。

最近ですと、奥尻の農家さんに短くても三日間とか、夏休み中以外から人を呼んで、農家さんの手伝いとか、そういう農家の勉強をするような林間学校に近いようなかたちの、そういったイベントを行ったら、奥尻での関係人口が増えるんじゃないかなということ、私はそういう企画を考えさせていただいています。

パブリシティの方は、私は去年まで実はスクーバダイビングをやっていました。耳が痛くて潜れなくなりましたので、パブリシティの方に移りました。パブリシティは、「緑館ホテルが閉館してしまった」ということで。緑館の再利用を検討してはいたんですが、「なんでじゃあ、緑館再利用したいのか」という点で考えると、「フェリーの瀬棚(せたな)便を戻したいよね」とか。あとは……。

——瀬棚便？

奥尻高校の部活を
支援する部活です。

Okushiri
Innovation
Division

Hokkaido
Okushiri
High School

6/29 ムーンライトマラソン前夜祭
16:45~17:50
奥尻町海洋研修センター内
Tシャツは文用紙のゆかり

6/30 ムーンライトマラソン後夜祭
18:30~20:30
旧青柳中学校、体育館入口通路突き通り
旧Tシャツ21枚販売、新Tシャツ予約販売

7/01 フェリー渡棚便出航前
10:30~12:30
フェリーターミナル渡棚待合所
旧Tシャツ21枚販売予定、新Tシャツ予約販売

※21枚は30日の販売で売切れ次第終了です。

1枚 ¥4,000~

北海道奥尻高等学校
TEL01397-2-2354 (事務室)

Tシャツの利益は
部活動運営費、
OIDの活動資金
となります！

海野…そうですね。瀬棚便が今年なくなってしまったんですよ。

——瀬棚と奥尻間のフェリーが今年なくなった？

海野：はい、そうなんです。来てたんですけど、今年なくなってしまったので。なかなか難しい問題ではあるんですけど、瀬棚便を復活させることを考えていて。

ただ、「瀬棚便を復活させることについていうのは、誰のためになるんだろうか」ということを考えて。もちろん、「島外の人とかが便はやっぱり楽になる」という点では、とてもいいことだと思っただけですけど。「そうじゃなくて、パブリシティで考えたいことは、『島の人のため』ということを考えていうことだよ」というふうになって。人口がどんどん高齢化していくなかで。じゃあ、お年寄りの島になってしまわないかかっていうことで、「お年寄りが増えていっても、みんなが元気に過ごせる、そんな島にしたい」ということで、今は「健康ランドを造ろう」とみたいな感じになっています。

心身ともに、そういったお年寄りが、例えば八〇歳のお年寄りももうサッカートカテニスとかバンバンやってたら、めちゃくちゃ面白いじゃないですか。「そういうのをできるような島になったら、とっても面白いよね」ということで、今そういったことを企画させていただいています。

OID（※）は私が今部長を務めさせていただいている部活動になります。OIDは、二〇一七年に、私たちの先輩、去年卒業された先輩方が、クラウドファンディングを行って、返礼品としてTシャツを



送って。で、約一五〇万円集めることに成功して、それから持続するために、部活動として作ったという感じですね。

最初はほんとに、当時三年生だった先輩方が二人と私で、部員を集められる期間のうちに一応、去年一年生だった私たちのなかから五人集めて、現在は一年生一人と、二年生が三人というかたちで活動していただいています。活動の内容は今年やったものと、奥尻の地酒のラベルというか、パッケージのデザインをさせていただいて、バックでお金をちよつともらって、それを遠征費に回して、というかたちをとったり。去年やったものだったら、地元へ貢献したものだったら、工事用仮囲いにデザインを描かせていただいて。それを、地元の土木関係の方と協力して作らせていただいて、工事用仮囲いにそのまま付けて置いたりしました。

今は、まだあんまり本格的には動き出してないんですけど、ワインの奥尻ワイナリーさんのロゴマークのデザインとか、デザイン系だとそういう感じで、地元へ貢献できるようなものは取り組んでいたりしています。

あと、そうですね。自分たちでやってることとしては、販売活動が今は軸になっていて、去年は返礼品で渡していたTシャツのリメイクをして、色を変更してまた販売してそれを三大祭りのなかで売ったりだとか、奥尻の学校祭で売ったりして、そういった感じでやらせていただいています。また今年は、新しく奥尻高校の公式のタオルを作らせていただいてそれを売って、先日売売しました。で、今後としては、「スウェットを企画して販売しよう」というかたちですね。

あとは、企業さんと組ませていただいたりもしています。今の段階では、無印良品さんとも関わりが深く、「ローカルニッポン」と

いった、地域のことについて書いてある記事を集めているサイトに書いて上げさせていただきました。その書いた文字の量のお金をいただいてそれをまた遠征費に回してというかたちで、循環させていただきました。

あとは、「つながる市」というイベントがありまして、それをシェアスタハコダテさんでやっているの。そちらに参加させていただいて販売しました。先日、Tシャツとかタオル以外はもう、奥尻のものはすべて完売になりました。こういった感じですよ。今後は、冬はなかなか動ける時期が少なくなってくるので、ネットを運用できるように検討したりとか。あとは、夏に向けての企画をもう作って、動けるようにしておくとか、そういった感じで活動していくかなと。あとは、秋口に販売検討しているスウェットの準備も、そろそろ始まりますね。

——なんかすごくいっぱいやっていますね。

海野…そうなんです。結構、やってて。

——忙しくないですか？

海野…そうですね。部活動の方は、もうずっと忙しい感じですよ。

特に、私たちの下の代の子たちが、今一人しかいないので、「ここで終わらせてしまったらやっぱりもったいない」っていうのがあって、自分たちの代でできる限り、残せるものを残してあげないと、と思ってですね。

2 高校魅力化の活動のやりがい

北野君は、「変化というか刺激みたいなもの」がほしいなと思つて、奥尻に来た。自分が結構大きい仕事を任されているから、それ自体やりがいがあると教えてくれた。さらに、大きな仕事のなかでも、いろいろあるから、「自分がどれを調べなきゃいけないのか」、「どれを取らなきゃいけない」のか、自分から考えて、能動的に動かなきゃいけないというのやりがいだという。そして、失敗を通して、経験値が高まったという。また、活動してみることで自分が見えてきたという。

でも、いざやってみると、実際大変だけど、でも何かを仕切れたり、何かを指示したりということが自分は向いているなということがわかりました。(インタビューより)

海野さんのやりがいは、

よくしゃべるけど、人前であんまりしゃべりたくないっていうか……でも、「よくしゃべれるね」って言われて、自分のそれが長所だなっていうふうに認められるようになって、自信がついたりしました。人にほめられるっていうのが、やっぱりうれしくて、それもやりがいだし……もちろん、自分たちで考えて、「いや、高校生が」って、「よその子が、よくこんなに考えてくれたね」って、そういうふうに認めてもらったり言ってもらえることが、すごく私にとってはやりがい。(インタビューより)

——どういふことをやってるかなというところが、わかってきました。次に、活動のやりがいについて。まず、北野くんから教えてください。

北野：活動のやりがいは、やっぱりさっき言っちゃったんですけど、自分を通して仕事をやってる感じみたいながあるっていう。ミクロな視点で実際に仕事をやってるんじゃないかって、自分が結構大きい責任っていうか仕事自体を任されてるから、それ自体をやってるやりがいみたいなものがあるっていうのが一つと。二つ目としては、結構大きな仕事でも、そのなかでももちろん、いろいろあるから、「自分がどれを調べなきゃいけないのか」「どれを取らなきゃいけない」っていうのを、自分から考えて、能動的に動かなきゃいけないっていうのが、やっぱり大都市と、こっちの違いかかっていうのを思っています。だから、能動的に動けるっていうのが、やりがいみたいな。ちよつと難しいんですけど。

——同じことを、やりがいじゃなくて、苦痛だと思う人もいませんか。

北野：いますね。

——でも、どうして奥尻高校の生徒は、こういうのがやりがいになっちゃうんだろう？

あるいは、北野くんの場合、やりがいになるんだろう？

北野：僕の場合は、中学までずっと、地元の大都市生まれで地元の大都市育ちだったんです。けれど、なんか変化というか刺激みたいなも

のがほしいなと思って、奥尻に来ました。

だから、みんながみんなそういうわけじゃないけど、「何かをやりたい」だとか、「中学でできなかったことをやってみたい」だとかっていう人が多分、結構いると思うから。みんな能動的に動けたり、こういう「町おこしワークシヨップ」っていう、みんなが一個の課題について、いろいろ考えるっていうことができるんじゃないかって思っています。

——いったん、町おこしを離れて、生徒会長としての話を少し聞かせてください。

地元の大都市のイメージとの比較になっちゃうだろうけども。生徒会活動、あるいは生徒全般の能動性について、どんなふうに感じます？

北野：まず、僕が生徒会になったときは、まだ一年生だったんです。そのときに、先輩方が誰もやってなくて、一年生の中の生徒会になっちゃったんですよ。それで、自分含めて役職が四つ、生徒会長、副会長、書記、会計があるんですけど、それに一人ずつしか入らなくて。ほんとに何かイベントとかが近づいてきても、實際何をやればいいのかっていうのが、ほんとにわかんなくて。もう活動のやりがいっていう面で答えるとしたら、やりがいはもうめっちゃめっちゃありましたね。あつたし、いろいろ失敗したんで、めっちゃめっちゃ経験値積めたっていうところもあります。

あと、何かイベントが当日本番になって、全体を仕切るっていうところが、ほんとに難しいなっていうことは、改めてわかったみたいな感じですよ。それこそ、奥尻は特にみんなが、さっき言った能動的に動

くから、受動的に動いてくれるっていうことが難しいかなっていうのは思いました。

——みんなが能動的に動く？

北野…能動的に動く。

——言い方変えると、「勝手に動いてしまつ」というところもある？

北野…そうですね。個人的になんか、勝手にいろいろ動いちゃうんです。それに対して、先生方も「何かイベントだったら、それは生徒全体でやれ」というつもりなんで、あまり口出しっていうかアドバイスカはくれないんです。それも含めて、みんなが能動的っていうか勝手に動いちゃうので、それも難しかったなっていう面はありましたね。

——今、「失敗を通して、経験値が高まった」ということだったんですけども。具体例を一ついただけますか。

北野…具体例としては、例えば球技大会があったんですけど。そのときに、一応全体を通して、何も事故もなくてうまく通したけど、実際、生徒会で話し合ってたのは、準備とかがほんとスムーズにいくみたいな感じで。「ボールはここにあるから大丈夫でしょ」「みたいな、「下調べも一回したから、大丈夫でしょ」みたいな感じで生徒会で話し合いました。でも、いざ本番になると、やっぱり結構、トラブルが起きたり、時間とかも大幅にロスしてて、最後の試合とかもあんま



りできなかったです。だから、「これはちよつとだめだな」、「次回につなげていこう」っていうことで、失敗がその次のための経験につながったんじゃないかなって思いますね。

——そういうのはやっぱり、あらかじめわかるというよりも、経験して高まつていく？

北野：経験値として高まりました。あと、自分の経験値とすれば、やっぱりこういう奥尻高校にいるんな人が来るから、生徒会長として校外の大人と話す場と呼ばれることが結構多いんですよ。そのときに、やっぱり全然話せないと、「あ、はい」みたいな感じで、ずっと受け身みたいになっちゃって。

——そうか。

北野：そうですね。やっぱり大企業とかすごい人を相手にすると、全部受け身になっちゃうのをよくないなっていうのをずっと反省してます。だから、実家とかこの間帰ったら、いろんなイベントに参加するのを、生徒会長になつてからやるようにはなりました。

——その生徒会長としての役割を果たせるように、自分で自分を訓練するイメージだったんだけども。

北野：そうですね。

——それ自体は、つらいこと、楽しいこと？

北野：最初、生徒会長になったときに、話飛ぶんですけど、Wi f i i ーネーっていうのがあります。そのときに、慶応の大学生の方と話しました。僕が奥尻高校に来たきっかけは、「映像撮りたい」っていうことだったんですけど、映像撮りたいから奥尻高校来たのに、ほぼ何もやってなくて、ずっとぐうたらしてました。なんかもうほんとに投げ出しかけているみたいで、「何やったらいいんですかね？」みたいなこと聞いたら、「とりあえず、目の前にあることやった方がいいよ」って言われました。そのときに目の前にあつたのが生徒会っていう役職で、生徒会長になりました。

そのときはぐうたらしてて、絶対あれやったら面倒くさいだろうなっていうのが、もう固定観念であつたんですよ。でも、いざやってみると、実際大変だけど、でも何かを仕切れたり、何かを指示したりっていうことが自分は向いてるなっていうことがわかりました。なので、どっかイベントを予約して参加してみて。最初は、電車乗つてるときに、「やっぱり今日、遊んどけばよかったな」みたいなことを思ってたんですけど、いざ参加してみると、結構話したり、「こういう交流って楽しいんだ」ということに気づけました。面倒くさいっていうことは、あんまり思わなかったです。

——ありがとうございます。それでは次、同じことを海野さんに聞きたいと思います。やりがい。

海野：そうですね。やりがい、やりがい。私の場合、今、やってい



る三つのことは、全部一応やらせていただいているんですけど、中学の先生が私に勧めてくれて、「島に行けば」というふうに言ってくれて、調べて、見つかったのが奥尻だったんです。

オープンスクールのときに「うちの学校は、グループワークをすごくやるんだ。とっても、たくさん人前でしゃべるんだ」と話を聞いて、私はすごくしゃべるのが好きなんですけど、人前でしゃべるっていうことが嫌いって言ったら変なんですけど、よくしゃべるけど、人前であんまりしゃべりたくないっていうか、緊張したりあがり症もあって、すぐだめだったんですよ。それを改善したら、とんでもない強みになるんじゃないかっていうのをすごく感じてました。それでこっちに来たときに、「じゃ、グループワークする」となりました。

あと普通の都心の学校では、私だったら札幌なんですけど、その札幌の学校にいたときに、「はい、じゃあ授業でグループワークしてください」と言われたときに、真面目にグループワークしてる人って、全然やっぱいいじゃないですか。札幌では授業たるいっていうのがあって、「こうじゃない？」って言ったたら、「まあ、そうだね」と流されちゃって終わって。それって話し合いじゃないよなって、私はずっとすごく思ってた。それが、「じゃ今度、話し合いができるよ」と言われたときに、話すのが好きなのですごくうれしくて。「じゃあ、ここにしよう」と奥尻に来ました。

実際来てみて、去年の一年生の一年間、たくさん人前でしゃべったんですよ。O I Dに入ってから、最初にもう町長さんにプレゼンしに行って、町長さんの前でしゃべったんですけど、すごい緊張しました。

でも、「よくしゃべれるね」と言われて、自分のそれが長所だっというふうに認められるようになって、自信がついたりしました。人

にほめられるっていうのが、やっぱりうれしくて、それもやりがいです。もちろん、自分たちで考えて、「いや、高校生が」って、「よその子が、よくこんな考えてくれたね」って、そういうふうに認めてもらったり言ってもらえることが、すごく私にとってはやりがいかなって思いました。

——海野さんは、話の中身もわかりやすいけども、同時に自分の気持ちも伝えるタイプの話し方ができるよね。

海野：そうですね。ありがとうございます。

——そういうのは、やっぱりプレゼンとかしながら、身につけてきたということ？

海野：そうですね。私は中身もわかってほしいんですけど、「プレゼンテーションって、何のためにやってるの」っていう、「何でやるの」っていうのを前に先生に聞かれて、そのときに、「伝えたいことを伝えるため」っていうふうに、私は答えました。

けれど先生に「それは、手法であって、本当にやりたい目的ではないんだよ」っていうふうに言われました。「じゃ、何ですか」って先生に聞くと、「相手の心を動かすこと」と言われました。先生の例を借りると、例えば「私が今、塩ラーメンを食べたいとしたら、そのプレゼンテーションする人は、私をしようラーメンを食べたいっていう気持ちにしなきゃいけないですよ」みたいな、「心を動かすっていうことをできるようにしたら、『プレゼン、ほんとにうまくなった』っていい

えるんだよ」っていうふうに言われました。「お、これすごい」って思いました。

3 活動に参加して得たと思うこと、成長したと思うこと

他の生徒の素晴らしい姿を見て、劣等感ではなくてあこがれを感じたり、自分の向上心が芽生えている。こうしたことの背後には、前述の失敗を経験値とできる環境や、発言の場が多く自身を見つめる機会があることが影響しているものと思われる。

そのときに、高専、函館高専の子が来てて、函館高専の子、同じ高校生なのに、めちゃくちゃプログラミングできて、「なんでこんなプログラミング、同じ高校生ができるんだろう」と思ってた。そこに差を感じて、「自分はそのままでもいいんだろうか」っていう心と、すごいあこがれ、「こいつすげえな」っていうあこがれの気持ちも重なって。いろいろ起業とか調べたり、いろいろ活動したりっていうのをやってたときに、考え方みたいなのが変わった感じですね。(インタビューより)

——それでは、次に移ります。

「自分が活動に参加して得たと思うこと、成長したと思うことはどんなことでしょうか」ということを、北野くんからお願いします。

北野…自分が活動に参加して成長したと思うことは、さつき海野が言っていた、発言の場が多くなったので。「自分がどう思ってるか」っていう、「自分がどう思ってる、何を伝えたいか」っていう、目的とか言いたいことだとかっていうのが、分けられるようになったのがあります。

——分けられるようになった。

北野…最初は結構、ぐちゃぐちゃにして、「これってこうでしょ」みたいな、率直な意見を話してました。率直な意見は意見で、かつ、「結局、この話し合いは何なのか」っていう、「何を目的とするのか」、「それはずれてないのか」だとかっていう、それも、生徒会を通じてできるようになりましたね。

——なるほど。ほかに、「自分自身で、自分が変わったな」と思うこととか、家族や友達から「変わったな」というふうに言われたようなこととかありますか？

北野…家族と友達に「変わったな」って言われたのは、中学生のころはそれこそありがちなゲームだとか遊びだとかっていう話が多かったんですけど、自分が、九月辺りに奥尻であった起業のイベントみたいなのに参加して、面白いなと思って（変わりました）。

そのときに高専、函館高専の子が来てて、函館高専の子、同じ高校生なのに、めちゃくちゃプログラミングできて、「なんでこんなプログラミング、同じ高校生ができるんだろう」と思いました。そこに差を感じて、「自分はこのままでいいんだろうか」という心と、すごいあ



これが、「こいつすげえな」っていうあこがれの気持ちが重なって。いろいろ起業とか調べたり、いろいろ活動したりっていうのをやってたときに、考え方みたいなのが変わった感じですね。

——同年の人が頑張っているのを見ると、響くものがあつた？

北野：ありました。「やっぱり、自分はこのままでいいのか」みたいな「ボーっとしてるままでいいのか」みたいな感じと、あと「結局目的があつて奥尻に来たのに、その目的を果たせないままでいいのか」っていうのがありました。響いたので、行動をできるようにあつたっていうのはありますね。行動をよくするようになったっていうのと。

あと、めちゃめちゃしゃべれるようになったっていうのがあります。結構人にアドバイスしたりします。地元の大都市に帰つたときに、中学校の友達が、「俺ってほんとはこういうことやりたいんだけど、みんながゲームとかばっかり話して、あんまりできないんだよ」って言うてるときに、俺が「それだったら、こういうふうな意識した方がいいよ」だとか、昔だったらあり得ない、人にアドバイスみたいなものもできるよになつたのを思いました。

4 島留学の目的

北野君は、大都市から脱出しただけでなく、なぜ脱出するのか、脱出して何をしたいかを考えて奥尻島に島留学した。北野君は映像を志しているのだが、大都市で映像の技術を学ぶよりも大自然で映像感性を育てることを選んだ。

映像をつくるときに、絶対に圧倒的に感性を持つといった方が、自分はすばらしいものをつくれるなと思つてて……いろんな感性を若いころから取り入れて、大人になつて映像をつくつた方が強いだろうっていう意味の感性でした。(インタビューより)

——北野くんは、「この島に来るとき、なんか考えてたことがあつた？」という話なんけども。どんなことを考えてここに来たの？

北野：入学した理由が、さっき「映像」って言ったんですけど。大都市に出たくなっていう面がありました。だから、大都市のその映像の専門学校に行こうかなと思つてました。けれどお父さんが奥尻高校見つけてきて、大都市で映像の技術を学ぶか、大自然で映像感性を育むかと思つたときに、これは圧倒的に絶対若いうちに感性を鍛え上げたい方がいだろうと思つて、奥尻に来ました。

そのときに、「映像っていうツールを使って、いろいろ発信していきたいな」っていうのは思つてて、カメラもそのとき買ったんですよ。買つてきたのに、ほんとに何もやつてなかつたので、島留学はそれが目的で、その「映像を使つてやろう」というのがありました。

——もうちよつとだけ突っ込んでいいかな？

北野：はい。

——「感性を映像というツールを使って表現する、あるいは、それを



通して感性を豊かにする」というのは、どんなイメージだろうか？

北野：大都市にいたときって、いろんな情報が回ってくるじゃないですか。だから自分の自我っていうのがあんまり持てなかったり、自分の意見っていうのが、あんまり持てなかったりするんですよ。でも、こっち来てから、自分から手に入れなきゃあんまり情報は入ってこないし、全然、周りも地元と違って、やっぱり感じることとか考えることって、場所によっても違ってくるんじゃないですか。

それだけで感性も変わるし、北海道って一回も行ったことない地域で、かつ島留学っていう制度で、いろんな人たちのところに来て、いろんなことを話し合っって、先に感性を鍛えていい映像みたいなのをくっつたらよいと思いました。地元の大都市だったら、ちょっと話戻るんですけど。映像をつくるときに、絶対に圧倒的に感性を持つという方が、自分はすばらしいものをつくれるなと思ってて。

映像技術とかは、もう大人にはかなわないから、「じゃあ、高校生の俺で、大人の世界にかなうものは何だろう」ってそのとき考えたときに、いろんな感性を若いころから取り入れて、大人になって映像をつくった方が強いだろうっていう意味の感性でした。

——なるほど。ところが、最初のころは？

北野：最初のころは、全然撮れなくて、ぐうたらしてて。生徒会長になって、ほんとに最近映像撮って、それを出して、賞取ったみたいな感じですね。



—すごい。おめでとうございます。

北野…ありがとうございます。

—いや、でもうれしかったよね。自分の課題が一つ達成できたんだから。

北野…そうです。でもほんとに、やっと一歩かなと思って。

5 活動に参加して得たと思うこと、成長したと思うこと

海野さんは、「よくしゃべれるね」って言われて、それが自分の長所だと自分で認められて自信がついた。人にほめられることがうれしくて、それらがやりがいとなった。さらに、企画書が作れるようになり企画を通して決裁も全部自分でできるようになり、何でもやろうと思えばできると自信がついた、と教えてくれた。

また、プロジェクトを行う中で企業活動をしている人とのネットワークが広がり、様々な機会を貰えるようになり、そのことが海野さんをさらに成長させている。

ここに來たから、人とのつながりがほんとにたくさんできた。で、自分がそれを紹介することもできるし、その人のよさを話すこともできるようになったし。もうほんとに、

いろんな能力がでて、人脈も得たし、私がしゃべる力っていうのも、もともとちよつとあったものもつと大きくなつて得ることができたっていうのもありました。(インタビューより)

——はい、それでは、同じことを今度は海野さんに聞きます。活動を通して自分のなかで得たと思うこと、あるいは、成長したと思うこと、どんなことがあるでしょう？

海野・私は結構、たくさんあるなと思ってます。得たことというより、初めから私が持ってたものがあつて、私調べることがすごく好きで。昔から、興味があることについては、すごい勢いで調べていくんですよ。刀にはまったときは、刀調べて、その歴史調べて、持ち主調べて、持ち主の歴史調べて、みたいな感じで、もう私はすごくのめり込んで。そういうことがたくさんあつて。

あと、それと同じくらい行動力っていうのが結構あつて。友達がいきなり、前の日に「ちよつと明日朝七時半に集まって、どつか自転車出かけようぜ」って言ってきた。「あ、いいよ」って言って。そのままほんとに七時半に集まって、自分の家から三時間ぐらいかけて、札幌記念塔、開拓の村まで、自転車で行つて。そういうことをやりたりするぐらい、結構アクティブに動いてて。それで、今回奥尻高校に来て先輩たちに、「じゃあ、O.I.D.やらない」って誘われて。最初はマーケティング部だったんですけど。その「マーケティング、やらない」って言われて。私は、頭があんまりよくなかつたんですけど。

——そんなことないから。

海野・いえいえいえ。ほんとに学力がちよつと低くて。だけど、商業系に行つてみたりとかしたくて。それは、お金を稼ぐっていうことだったりだとか。祖父も父も、営業の仕事をやってたんですよ。私も、人としやべることが好きっていうのもあつて。じゃあ、自分の仕事についてとか、自分の使ってる商品についてだとか、人にいっぱい話して、契約をつけたりだとかしていくつて、営業の仕事にすごいあこがれを持つてました。

「お父さんもおじいちゃんも、かっこいいな」つて、昔思つたので、商業系にも行つてみたんですけど、結局、中学校の途中のときに、「いや、私には無理だ」つて挫折しました。

それで奥尻に来て、こういうマーケティングができるような機会をいただいて。「じゃあ、これほんとにがんばつてやるう」と思つて。すごく試行錯誤したつていうか。一年目で、もう先輩も何していいかわかんないし、私もこの高校に入つてすぐで何していいかわかんないんですよ。

「じゃあ、Tシャツ売ります」つてなつたときに、「企画書を作ってください」つて言われて。「企画書つてどうやって作るんですか」つてなりました。すごくたくさん調べて、企画書作りました。それで、成功しました。「今度、企画して成功したつていう報告書を作ってください」つて言われて。「報告書つてどうやって作るんだ」つてまたなりました。そういうのもずつとやつて、やつて、やつて繰り返して。今はもう、企画書もだいたいスムーズに作れるようになりました。

それで、これやつて途中で、「あれ？ 昔、商業高校入りたいつて

言ってたけど、今、ここでもできてるぞ」と思ってた。「企画書も作れるようになったし。企画通して決裁とかも、そういうのも全部、自分で今できるようになったぞ」ってなってる。何でもやろうと思えばできるんだなって、やっぱり思いました。私、「行動力がある」って、先ほど自分で言ったんですけど。例えば、「これ、ちょっといいんじゃない」って先生からフツって言われると、ちょっと火がついたらやりたくなくなっちゃいます。次の日にカタカタやって来て、「はい、じゃあ、やりましょ」みたいな感じでやったりします。

さっき「九月に起業のイベントがあった」って言ったんですけど、そのイベントは実は、O I Dも自分たちの能力向上のために参加しました。そちらで、クリプトン・フューチャー・メディアっていう初音ミクをつくった会社の社長さんが来てくださって、伊藤さんっていう方なんですけど。伊藤さんとそのときに私、すごい話をして、質問させていただいて、「Tシャツを売ってるんですけど、どうしたらいいですか」みたいな話をすごい偉い人としやべって、フィードバックもらうというのをやりました。

そういう、人とのつながりっていうのももらえて。その社長さんとつながったお陰で、また今年の夏に、「ホトハ」という、高校生が集まるカフェに行かせてもらいました。そこでは、ウカリっていう団体をつくっている種市さんという方だったり、いろんな方とほんとに出会わせてもらいました。「ステッピングアップ」っていうイベントが札幌であつたんですけど、そちらの方にも参加させていただきました。「じゃあ今度、海野さんもぜひ、話してくださいよ」って言われて。そういう、ほんとに人に発信する機会とかもたくさんもらいました。

ここに来たから、人とのつながりがほんとにたくさんできた。それで、

自分がそれを紹介することもできるし、その人のよさを話すこともできるようになったし。もうほんとに、いろんな能力が出て、人脈も得たし、私がいしゃべる力っていうのも、もともとちょっとあつたものがもっと大きくなって得ることができたっていうのもありました。

あとは、やっぱりO I Dやって、マーケティングの能力っていうのも、自分の力にすることができました。O I Dでやってたことで、すごく簡単なことなんですけど、ポジティブポスというのをやったんですよ。ポジティブポスって、人のいいところを書いて体に張り付けるやつなんですけど。私、それすごい好きで。一年のときのこの手帳があるんですけど。手帳には私と同じ寮生二人。寮っていうか、民宿に泊まって下宿してる子がいるんですけど。その子たちとポジティブポスやったんですよ。そしたら、私「ババア」とかめっちゃ書かれたんですけど。「それも含めてほめ言葉だぜ」っていうふうに言ってくれて、めちゃくちゃ面白くて。もう悪口みたいなのも書いてるんですけど、すごく楽しくて。それで、「いや、これあんたのいいところだから」と言ってるんですよ。そしたら、体がすごい付箋だらけになるんですよ。これ、一つ一つほめ言葉って考えたら、めちゃくちゃうれしくて。

——そうですね。

海野:はい、それで、「人をほめるって、こんな大事なことなんだな」っていうのとか、そういう感性っていうのもすごくもらえたなというのもあつて。それを使うと、うまく結構、人と人との話し合いとか進められるようになってくるんですよ。それがすごく私にとって得たことかなって思います。

——今の話のなかで、「自分自身の気持ちの問題、感性の問題」と、それから「テクニク、技術としてのコミュニケーションのことも同時に得た」というふうに、そんなふうと考えていいですか？

海野…はい、大丈夫です。

——海野さん、中学時代は、今とおんなじような人だったの？

海野…全然、違いますね。私、中学時代は人間不信でした。だけど、一年の担任の先生が、すごくいい先生だったんですけど、クラスがすごいその先生のお陰で仲良くて。どんどんどんどん自分も「あ、大丈夫かもしれない」という前向きな気持ちになれて。それから二年間、あんまり変動なく過ごして。それで、ここにこんな感じで来て。そして、もっと前向きにしゃべれるようになったっていうのがあります。

——今や人間が好きになった？

海野…そうですね。嫌いなところももちろん、あるんですけど。やっぱり人と関わることは、自分は元からしゃべることが好きだったので、楽しくて、それを肯定できるようになったっていうのがあって。

——なるほど。

海野…はい。





— なんかすごいポジティブな感じがします。

海野…いや結構、話してたら、「ネガティブ」って言われるんですよ。だけど、私は前向きに持つてるつもりなんですよ。だから、「ネガティブだけど、ポジティブじゃない」って言って、人に話してるんですよ。

— ネガティブだけどポジティブ？

海野…そうなんですよ。なんか、矛盾って面白いなと思ってて。

— でも、ポジティブなだけだったら、天然かもね(笑)。

海野…そうなんですよね。

— それとは違うことだね？

海野…はい、ちゃんと考えてる。

6 地域への想い

北野君にとって、奥尻島への想いは奥尻の人たちとのつながりによって形成されている。北野君は奥尻に来てすぐに地域の人と打ち解けることができた。彼は大都市での生活で無意識のうちに

「人のコネクト」の薄さを感じていたのかもしれない。

でもやっぱり、こうやって打ち解ければ、すぐ打ち解けられるし、……すぐ仲良くなれる、打ち解けられるみたいな感じで……そういう環境に地元の大都市とかでは恵まれなかった。人と人の温かさっていうか、つながりがある感じが。めちゃくちゃ深く感じられたっていうところで、地元の大都市じゃなかった地元愛っていうのが、来てすぐ生まれませんでした。

こういうところで人の温かさを学んだのに、結局は俺も地元の大都市の人間の一部になっちゃうんだろうなみたいなことは絶対嫌だなと思うんで。なんで、こういうのをつなげていきたいなっていうのは、ほんとに思いました。(インタビューより)

海野さんは、奥尻の人間関係の難しい面との出会いを経験している。その結果、単純に地域の間関係が好きという感情を持つのではなくて、地域の人間関係を面白いと述べ興味を対象化している。

はい、なんか好きって言っちゃると、悪いこともあるから好きとは一概には言い切れないんですけど。それ、面倒くさいなって思うこともあると思うんですよ。(インタビューより)

悪いことっていうか、悪いうわさがすごく早く回っちゃ

うのは、お互いによくないことではあると思うんですけど。でもだから、それだけ回るの早いから、つながりが深い人ほど、ひとこと言うだけで周りに影響力与えられるから、みんながみんな影響力強いっていう感じで面白いなって、すごい思ってるんですね。(インタビューより)

なお、海野さんの話から推測されるのは、好きだし嫌いでもあるという意味で、奥尻の人間関係に深く入り込んでいるように思われる。

好きっていうのもあるのかもしれないけど、嫌いっていうのもやっぱり同時にあるので、私のなかでは「面白い」っていうところにあるのかなって思います。(インタビューより)

——それでは、次にいきます。「地域についての思い」。二人とも、外から来た人なんだけども。この地域についての思いを聞かせてください。

それじゃあ、最初に北野くん。今、奥尻島に対してどんな思いを持っていますか。

北野・奥尻への思いについては、めちゃくちゃ熱くなったみたいなの。

——熱い？

北野：熱いみたいな感じで。その理由としては、やっぱり比べちゃうんですけど。地元の大都市にいたときに、マンシヨンの隣の人はまだ近所とかは知ってるけど、隅々まで知らないじゃないですか。「じゃあ、マンシヨンの一三階の人は、誰誰だ」みたいなことは知らなくて。

でも、こっち来てから、人と人とのつながりの温かさをめっちゃくちゃ感じて。その理由としては、学校の、確か外から来た人を出迎えたイベントに地域の人も来てたんですよ。そのときに、その地域の人と会って話したときに、自分が住んでるところにめっちゃくちゃ近くて、「じゃあ、今度遊びに来な」って言われたときに、「あ、わかりました」と言って、その週の土曜日に行つたんですよ。遊びに行つて、お茶とかお菓子とかもらつて、話したら、「自分、映像やってるんですよ」っていうことを言ったら、そのときに、「あ、じゃあ、これ持つていきな」って、いいドローンをくれたんですよ。ドローンくれて、そこにカメラついてて。「あ、じゃあ、これで映像撮れるじゃない」って、「え、ほんとにいいんですか？」みたいなこと言つて。ほんととは外から来る人に対しては、あんまり仲間に入れないと思つてすけど。

でもやっぱり、こうやって打ち解ければ、すぐ打ち解けられるし、こんなすぐ、「すぐドローンくれる」みたいな、すぐ仲良くなれる、打ち解けられるみたいな感じで。

そういう環境に地元の大都市とかでは恵まれなかった。人と人との温かさっていうか、つながりがもうめっちゃくちゃ深く感じられたなっていうところで、地元の大都市じゃなかった地元愛っていうのが、来てすぐに生まれました。

「第二の故郷になるんだろうな」って思いながら奥尻来たけど、もうそれがほんとに入つてすぐのことだったから、やっぱり地元っていう

のが感じられたみたいな。

——そうすると、北野君の住んでる地域では、住んでる人がもうみんな顔見知りになった？

北野：ほぼ顔見知りですね。ほぼ知つて。特に、ほかの箇所と比べて、一番人口が少ないんですよ。なので、車とかが通つたら、「誰誰さんだ」みたいなことがわかるし。「もう、なんでここにこういう人がいるか」とか、「隣、今日いいよ」みたいなのは、もうすべてわかるんで。

そういう面に関しても、やっぱり高齢者が多いんで、「誰誰さんが具合悪くなった」っていう情報とか、「誰誰さんがどっか行つてるから、誰を見守つといて」みたいなのが、そういう地域間でできるのが、めっちゃくちゃいいなと思つて、一つのコミュニティみたいな、コネクトみたいのが。

——ちよつと教えてほしいんだけど。ああいう地域だと、例えば、北野くんが元気のない顔をしてたら、そういうことはみんなが気にしてくれるわけ？

北野：結構、気にしてくれますね。俺が、今民宿に下宿せてもらつてるんですけど、俺が具合悪くて、「ちよつと具合悪いです」って言ったときに、民宿の人に出会つて。そのとき、そしたらかぜ薬すぐ取つてきてくれて、「じゃあ、今日は、安静に休んでな」とか、「冷えピタとか、氷枕とかあげようか」みたいなことを言われて、「ありがとうございませう」みたいな。



なんか地元の大都市だったら、あんまり他人のこと気にしないって
いうか、他人の事件とか、他人の人生に関わりたくないみたいな考え
が多いと思いますけど。

人とのコネクトって、これほど大事だし、これほどめちゃくちゃい
いことなんだっていうことを知って、なおさら大切だなっていうこと
を思いましたね。

——北野くんとしては、そういう人間関係はいい感じ？

北野…人間関係いい感じだし、これ自体をなんか将来につなげていき
たいなと思いましたね。職業とか就くときに、最初はどつかの会社で
高収入で稼げればいいやみたいな。ほんとにAI時代だから、いろん
なことはAIに任せればいいやみたいことを思ってたんですけど。で
も、それこそAI時代になって、人と人との関わりが少なくなってる
ときで、こういうところで人の温かさって学んだのに、結局は俺も地
元の大都市の人間の一部分になっちゃうんだろうなみたいなことは絶対
嫌だなと思うんで。なんで、こういうのをつなげていきたいなってい
うのは、ここに来てほんとに思いました。

——すごくいい関係がつくれますね。

北野…つくれました。

——じゃあ海野さんもおなじこと。



海野：はい、そうですね。ほんとにその地域の関わりっていう点で、「うわさが回るのが早い」とか、「地域のつながりが強い」とか、「ご近所さんが顔見知り」だとかそういうのって、田舎とかちよつとせまいコミュニティだからこそある面白さだなんて、私はすごく思ってます。それが壁になってるってことも、ちよつと課題になってるっていうのもあって。それに焦点をあててるのは、パブリシティがあるんですけど。

QOL、生活の質の調査を慶応大学のチームがちよつと前にやった、数年前にやったんですけど。そのときに、「隣人関係が一番困ってる」って実は奥尻島で出て。「おや」ってなるんですよ。「あんなにご近所さん仲いいのに、隣人関係で困ってるんですか」ってなって、私も結構、びっくりしたんですけど。それ聞いたときに、「それで島から出て行くちゃう人がいた」っていうのを聞いて、「強い」とか、「強すぎる」っていうのがいいことなのか悪いことなのかは、ちよつと考えるところもいろいろあると思うんですけど。

私は自分が話してて、自分がいいと思ってる人のことを悪く言われるのは、やっぱり嫌だなと思ってるので。そういうのって、結構学校の先生って悪く言われてるんですよ、地元の人なかで。

——ほんと？

海野：はい。「よそ者だから」っていうのもあって、先生方ってやっぱりお仕事あるんで、遅くまでいて、地域に交流する機会もなかなかいっていうのもあって、結構誤解されてて。

「あの先生は、よく生徒に怒ってるんだ」とか、「いや、あの先生、な

んか暗いわ、雰囲気」とか言って。それ聞いたときに、「え？全然そんなことないですよ。もう学校だと、めっちゃくちはじてますよ、先生」みたいなのがあって。それを、誤解したままにしとくのが、すぐもつたないってどうか、私としても嫌なので、じゃあ、私はその誤解してる人と仲良かったから、「いや、違いますよ。この人、こういう人なんですよ」っていうふうに言えるから。

私、そういう点ですごく、地域の人と仲良くさせていたでいます。自分たちには、島おじってという関係があるので、その島おじの方ともすごく仲良くさせていたでいます。そういうときに、地域で例えば、「隣人関係困ってる」っていう結果があつて、「先生のこととか、自分の友達のこととか、誤解してる人がいるんだよね」ってなつたときに、「じゃあ、どうしたらいいと思う」っていう相談を、その島おじの方にしたりだとか、自分が仲良くなつた人に行ったりだとか、そういうこともできるっていう点で、すごくいいなって、私思っています。

悪いことっていうか、悪いかわさがすごく早く回っちゃうのは、お互いによくないことではあると思うんですけど。でもだから、それだけ回るの早いから、つながりが深い人ほど、ひとこと言うだけで周りに影響力与えられるから、みんながみんな、影響力強いって感じですか。いい面白いなって思ってるんですよ。

——面白い？

海野：面白いと思います。

——「好きだ」ではなくて、「面白い」？

海野：はい、なんか好きって言っちゃうと、悪いこともあるから好きとは一概には言い切れないんですけど。それ、面倒くさいなって思うこともあると思うんですよ。

——学校さぼって歩いてたら、すぐバレるといっ？

海野：バレますね、絶対それ。それ絶対バレると思いますね。北野くんもさっき言ってたんですけど、私もかぜひいて、最近寝込んだんですよ。そのときに、やっぱり寮母さんはずいやすしくて、おかゆ運んできてくれて。二階の部屋なんですけど、わざわざ階段上り下りして、おかゆ運んできてくれて、氷枕換えてくれて。薬と栄養ドリンクまでわざわざ持ってきてもらって、「大丈夫？ 大丈夫？」って、なんかもう一日に四回ぐらい見にきてくれて、「あ、大丈夫です」って言いながら寝てたんですけど。

そういうのもあつて、家族じゃないけど、家族みたいにほんとに考えてくれるっていうのもあります。たくさん話していると、やっぱり町立に移管して、こういう島外から人を呼ぶようになって、それを受け入れをするって考えたときに、「じゃあ、この子たちを預かるってなつたら、私たちどうしたらいいんだろうね？」っていうことを、ほんとに一年目は、「はい」ってすぐ言わなかつたみたいなんですよね。〇〇さんっていう方が私の寮母さんですが、「はい」って言わなくて、「一年目、どうしてやらなかつたんですか？」って聞いたたら、「一年間、家族でちゃんと会議して、話して。それで二年目、『じゃあ引き受けよう』ってしたんだよ」っていうのを言ってくれて。それだけ、島の外から来る人のことも考えてくれてるんだなっていうふうに思ったりとか。

私が見えてる世界って、やっぱりせまいコミュニティの中のまま
 いコミュニティなので、全部通して見てるわけじゃないから、まだ
 何とも言えないですけど、ほんとに密接っていうか、ちよつとすぐそ
 こ歩いてたらずぐ、「あ、あれは高校生の何何だ」みたいな、気づいた
 ら名前広まったりするんです。特に中学生とかすぐ早くて、そう
 いうのもあるんで。好きっていうのもあるのかもしれないけど、嫌いつ
 ていうのもやっぱり同時にあるので、私のなかでは「面白い」ってい
 うところにあるのかなって思います。

——なるほど。

海野：はい。

——そういう意味での海野さんは、さっきの繰り返しになります好
 き好きっていう天然の好きではなくて。

海野：そうですね。好きだけではないかなっていうのがあります。

7 地域との将来のかかわり方

北野くんも海野さんも、卒業後に地域と関わり続けたいという。
 二人は関係人口としてかわることを模索している。

地域との関わり方は、従来は定住人口となるか交流人口（観
 光や研修での訪問客）となるかの二択で捉えられてきた。しか

し、最近になって関係人口という考え方が生まれ、関係人口が地
 域活性化に果たす意義が明らかにされてきた。関係人口は定住人
 口と交流人口の間のどこかに位置づけられる人々であり、インタ
 ビューの中で海野さんが風の人と言っているのは関係人口のこと
 である。関係人口となった人は、地域の外に住んで地域に対して
 金銭的支援や知識、技術の支援を行う。地域住民と地域外の人と
 をつなぐことも行う。地域を紹介する人も関係人口である。

大学入ってから、ちよつと役場の方に顔出させてもらつ
 たりとかして……高校の方に私が話をさせてもらつたり、
 交流したりする機会をいただいたり、そういうことで関わ
 れたらいいのかなって、すごい思ってます。（インタビュ
 ーより）

「土地の人」には、好きだけちよつとなるのは今は難
 しい」とか、私は好きだけど、奥尻にずっと住むことは、
 自分がやりたいこともあるから難しいと思ってるので。「土
 地」じゃないけど、土になるんじゃないけど、風にはなれ
 るよね」っていう、ほんとに関係する人をどんどん増やして、
 周りを巻き込んで、奥尻とつないでいたらいいなってい
 うふうに考えてます。（インタビュアーより）

——それでは、次、続きます。将来、この地域とどう関わりたいですか。
 北野くんからお願いします。



北野：5Gの時代になって、「映画一本一〇秒ぐらいで誰でもダウンロードできる」っていう、それこそ映像がめちゃめちゃ何か広告だとかっていうのにいろいろ使われる時代で、その映像っていう最強のツール、個人的には最強のつなぐツールだなと思ってます。それで、奥尻のいろんなものを撮ったり、これからやっていきたいなと思ってることなんですけど、撮ったり、奥尻自体をもうブランド化しちゃって、それを映像でアピールするみたいなのを、もしかしたら、奥尻じゃなくなるかもしれないんですけど。でも、奥尻で映像を使った関係の仕事はやっていきたいなっていうことを思ってます。

あと、さっき言ったんですけど人と人とのつながりっていう、僕の地元にはない漁業とか、その自然の関係者っていうのが、やっぱり北海道って多いじゃないですか。特に、この島だったら。だから、その人たちとも関係を切らさずに、将来例えば僕がこういう交流、交通関係みたいな仕事に就いたら、「じゃあ、地元の大都市まで魚を輸送する手伝いをするよ」みたいな、そういう面で俺が奥尻の、地元の人達とか奥尻の人たちを助けたり、僕自身が何か困ったときに、奥尻の人々に助けられたりっていう、そういう関係を卒業しても築いていきたいなと思ってます。

——それは、「具体的にはどういう方法かっていうのは、まだ明確じゃないけども。一つ、映像という自分の強みを生かしたい」という、そんなふうにご考えてよろしいですか？

北野：はい、そうですね、はい。



——それでは海野さんは、高校卒業してどうしましょう？

海野・私は大学進学を今、考えていて、慶応大学総合政策学部っていう学部に行きたいんですよ。その学部が何をやってるかかっていうと、地方創生のことだったり、そういったローカルなことだったりとか。あと、ほんとに町おこしみたいな、そういうこととかに目を向けて考えたり、いろいろ動くような学部なんです。

特にそれで最先端っていうか、もう一歩先をいってるのは、日本ではやっぱり慶応大学なんですよね。私はすごくそういう、ほんとは行きたくて。そこで勉強して、今考えてるのは、ほんとに海外に行きたいっていうか、途上国とかを発展させたいみたいな、そういうのも考えてるんです。けれどそれよりも今後、私は今やってることを、もう置いてくんじゃなくて、大学人つてからもちよつと役場の方に顔出させてもらったりとかして、昔いた卒業生として、「こういうの、どうですか」とか。

あとは、ほんとに卒業して、もし大学行つてから、もう高校の方に私が話をさせてもらったり、交流したりする機会をいただいたり、そういうことで関わられたらいいのかなってすごい思ってます。

あと、お世話になった寮には、やっぱり年に一回とかは行きたいなっていうのもすごいあるので。そういうふうに、つながりを切らずに関わっていきなうって思ってます。

私ができることは、今この発信することだったり、〇〇荘にいる女子で、離島にいる女子高校生だから、「離島JK」っていう言葉を作ったんですよ。「離島JKってすごくくない」って言ってます。

「そういうことをせつかく言えたんだから、『じゃあ、離島JKやって

ました』っていうのもあるから、もつとよきを発信していこうよ、今のうちに」って言って、「今のうちに発信した」っていうことを、そのまま大学とかどこ行っても持っていきたい。

私でも関係人口を増やすことって、多分すごいできると思うんですよ。だから、「土地の人には、好きだけどちよつとなるのは今は難しい」とか、私は好きだけど、奥尻にずっと住むことは、自分がやりたいことでもあるから難しいと思うので。「土地」じゃないけど、土になるんじゃないけど、風にはなれるよね」っていう、ほんとに関係する人をどんどん増やして、周りを巻き込んで、奥尻とつないでいたらいいなっていうふうに考えてます。

——離島JK？

海野：離島JKです。面白いですよ。

——うん。

海野：なんか言っていて、「うわ、なんかすごい現代っ子っぽい」と言っていて結構写真撮って、ネットに上げるっていう。海のきれいさとか、

——そういうサイトを作るの？

海野：サイトはまだです。サイトとかの運営はしてないんですけど。「今後、なんか企画を考えていけたらいいよね」っていうことで、自分たちがやりたいことをそれぞれいっばいやって忙しんですけど。

残せること何か一つ残したいなっていうのがあります。

——二人とも共通して、関係人口として今後関わっていきたくても、そのやり方については模索中？

北野：そうですね。

海野：私は大学にほんとは入れたらですけど、大学のなかで学んでる地方創生を、奥尻に知識をどんどん渡していけたらいいなっていうのを、すごい思ってます。

——そうか、すごいです。

海野：はい。

——大学に入り込んで、大学の知識をこっちへ渡す？

海野：渡す。「担い手ってやっぱり、地元の子どもたち」っていうのが、すごい私はあるので。例えば、今ここにも地元の高校生、高校生っていうか、地元の中学から高校に来た子たちがいるんで、結局その子たちの親は、地元にいるわけじゃないですか。だから、自分たちの家だから、そこをなくさないために、その子たちが主体的に動けるようにした方が、多分地元の人もやっぱりつながり深いんで、喜ぶと思うんですけど。

部外者がやったら、「いや、押し付けがましい」とかっていうふうな

ことも、まだ言われちゃうっていうのも、私実はO・I・Dやってたときにちよつと体験してて。Tシャツ売ってたんですけど。「遠征費を稼いでますよ」って、その宣伝で歩いただけでも「押し売りしてる」っていうふうなクレームが入ったりだとか、そうだったこともあったので。身内っていったらあれですけど。中の人、土の人になる人たちが、もつと軸をしつかりできれば、自分たちでほんとに人口を増やしていけるんじゃないかなって思ってます。

——そっか。二人とも島外から来た人で。島外から来たから、の利点もあるかもしれないけども。同時に島外から来てるから、地元との関係づくりにおいて、考えなきゃいけないこともありそう？

海野…そうですね。

結構、っていうか、もうたくさんあると思います。やっぱりご近所付き合いってなかなか、現代は難しいと思うので。

昔、近所付き合いとかがあった文化っていうのが、例えば夫婦が住んでたとして、家族が住んでたとして、その横に住んでるおばあちゃんかいたとして、お母さんが家にいるときに、その隣のおばあちゃんが煮物教えてくれるとか、日本はそういう文化って昔あったと思うんですよ。でも、今ってそんなことないじゃないですか。隣の人が来て、「あ、煮物教えてあげるよ」なんて、なかなかないと思うんですよ。なんだかそういうのがないなかで、島ってそういうの、まだ多分あると思うんですよ。なんか「煮物作ってきた」とか、「おすそ分け」とか、そういうのがたくさんあると思うんで、それをその土地の子たちが自分たちで守っていったらいいなって思うんですよ。

——いいことだと思います。

海野…はい、ほんとに。

——「土地の子たちが当たり前のことだと思ってるのが、大事なことなんだよ」とか、「それを守るために、こうしたらいいんだよ」というようなことが、地元にいるとちよつとわかんなかったりするかもしれないからね。

海野…そうなんですよね。

8 インタビュー項目終了後のフリートーク…

関係人口として

二人は奥尻高校の今には満足・安心しているがこれからも取り組みが継続していけるかについては心配し模索をしている。高校の中での継続の仕組みだけでなく、地域の中での変革への抵抗感と向き合うことも模索している

地元の人がまだ、抵抗感みたいなのがあるんで、それを変えたいなってずっと思ってます。でも、それってやっぱり地元の考えって根深くついているから、めちゃめちゃ難しいんですよ。……それを考えるんじゃないかって、もうちょい、もつと

他の人を巻き込んで、奥尻高校だけじゃなくて、実際奥尻高校って島全体を高校としてやっていますけど。
そこをつるんでいけたら、そういう抵抗感がなくなったり、もっとからんだり、何か発信していくことがおもしろいかなっていうことを多分、気づけると思うんですよ、奥尻だったら。(インタビューより)

——あらかじめこちらで用意したのはここまでなんですけども。その他なんか、「これ言っときたい」ということがあります？

海野..わ、何だろ？ その他？ そうですね。

——どういう順番でも。これは。

海野..なんかある？

北野..海野さん、言いたいことあったら、先いいよ。

海野..そうだな。奥尻高校は、今は多分、普通科の高校では上の方にいると思うんですよ。こういう取り組みとかをたくさんやって。だけど、闘争心がなくなってくると、すぐストンって落ちる位置にいますよね、今。だから、闘争心をなくさないために、例えば今、私のその後輩が一人って言ってたように、O I Dの存続だったり、高校自体の発展の仕方とか、そういう点をすごく、私たち自身ももちろん模索してるんですけど、ほかの人からの外部の視点もいただきたい。



なので、ちょっと広報していただければ、奥尻高校はほんとに、いろんな大学の方が来てくれてて、お話とか聞いたりもしてるので。そういう面で来てくださったらいいなっていうのもあります。

——そうですね。

海野：はい、ぜひ、そういったことを広めて。

——今やっつてること、ほぼ合ってるように思います。

海野：そうですね？ やり方もあっていきますか。

——資源に乏しいところが、「完璧な計画を立ててやろう」とか、あるいは、外から豊富な資源を投入して、何か新しいことをやろうとするよりも。今あるものを大事にして、今あるものから何か作っていく。これを料理の方法に例えて、あるもの使いの料理とかあり合わせ料理とか、そういう言い方をするんだけど。

作っていくなかで、料理の形ができてきて。で、また発展して。「次、こういう料理を作りたいな」という。いきなり完成形を考えるんじゃないくて、周りにある物を使ってスタートするっていうやり方をされているので、持続可能性という意味で、あるいは、地元の生態系を壊さないという意味で、その場での創意工夫が楽しいという意味で、正しいことをなさっているように思います。

海野：ありがとうございます。

——なんか言いたいこと、言っておきたいこと、あるいは、聞きたいことでもいいし。

北野：まあ、大体海野が言ってくれたんで。

確かさつき言ったんですけど。地元の人はまだ、抵抗感みたいなのがあって、それを変えたいなと思ってずっと思ってます。でも、それってやっぱり地元の考えって根深くついているから、めっちゃめっちゃ難しいんですよ。

それで、さつきの話聞いて、それを要するんじゃないかと、もうちょっと、もっと他の人を巻き込んで、奥尻高校だけじゃなくて、実際奥尻高校って島全体を高校としてやっていますけど。

そこをつるんでいけたら、そういう抵抗感がなくなったり、もっとからんだり、何か発信していくことが面白いかなっていうことを多分、気づけると思うんですよ、奥尻だったら。だから、もうちょいそこら辺を変えていきたいなっていうのは、今聞いて思っていました。

——あと、奥尻のなかでも、「変えていきたい」と思ってる大人もいるみたいですね。

海野：そうですね。すごくアクティブな人と、全く興味ない人と、「全然、そんなんやんなくていいよ」ってなってる人たちがいて。そうなんですよね。

役場の人と、地元の人と、学校とで、結構位置付けが平面ではないっていうのがやっぱりあって。それを今度、平べったくできたら、一番

協力しやすいなっていうのは、やっぱりあるので、はい。

——それができるのは、高校生かもしれません。

海野…そうですね、ほんとに。

——そして高校生は助けてもらえるところがあるから。

北野…確かに。

海野…みんなそうなんですよ。

みんななんか、「いや、高校生は今のうちに、何でもやっときなせよ」「っ
て言うんで。やっぱりほんとにそうだと思うので、はい、やっていけ
たらと思います。

——じゃあもつ、皆さんのなかでは、戦略もすっかり立ってるような
ので、それは間違いないと思うので、楽しみにしています。

北野…やってみます。

海野…はい。ありがとうございます。

——今日はお忙しいところ、ありがとうございました。

町立移管が示した高校教育の地域主義的転回

——奥尻高校の実践から見える高校魅力化の意義——

青山学院大学 樋田 大二郎

キーワード 高校魅力化、地域学校協働、町立移管、地域学校協働、町立移管、よそもの・わかもの・ばかもの、
アウラ、レリバンス、フロア、地域課題解決型学習

奥尻高校と奥尻島の実践から多くのことを考えさせられた。調査結果を踏まえて高校魅力化の論点を、地域主義的転回の視点からいくつかを紹介したい。

1 「地域とともにある学校づくり」と 「学校を核とした地域づくり」

奥尻高校の町立移管は、町が統廃合の主導権を持ちたいという理由及び中学卒業生が島外に出る状況を改善したいという理由で町長が打ち出した方針だったという（『地域人材育成研究』第4号）。今回の訪問調査からは、町立移管は、概ね町長のねらいにかなった結果をもたらしていることが分かった。

しかし町立移管は町長のねらい以上の果実をもたらしていた。地域と高校の協働による、地域と高校の同時的で双方向的な活性化である。奥尻島では高校と地域は、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を併せて実現しつつある。

上記の“ ”でくくった文言は文科省のパンフレット「これからの学校と地域 コミュニティ・スクールと地域学校協働活動」（令和二年三月）で用いられるキャッチフレーズであるが、初代の俵谷俊彦校長は同パンフレット以前に地域学校協働の意義に気づき、まなびじま奥尻プロジェクトを開始していた。そして、奥尻高校は町立移管の初年度から町おこしワークショップを実施し、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を併せて実現して、地域と学校のパートナーシップに基づく双方の「連携・協働」を推進していった。

ここで、文科省が提唱する地域と学校の協働の歴史を振り返る。まず、文科省はチーム学校の取り組みやその前史の段階から、学校教育はもはや教師が教室にこもって教師王国を作るとは困難であることを考えていたことが分かる。チーム学校を論じた大橋によると一九九〇年代以降の段階では、「学校内の問題」を学校外の専門家との協力によって解決しようとした（大橋二〇一七）。二〇一〇年代以降には子ども「学校外での問題」を学校外の力を借りて解決しようとした。そして、近年の「開かれた学校論」では子どもへの教育全体を充実させるという視点からのチーム学校論を唱えるようになった。

奥尻高校の実践と時を同じくして、文科省はチーム学校からさらに一歩進み、地域と高校の双方向的な協働を提唱した。平成二十七年に中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（中教審一八六号）」（平成二十七年二月二日）で、地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支える「地域学校協働活動」を推進することとした（「地域学校協働本部」）。

翌、平成二十八年には中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第一九七号）」（平成二十八年二月二日）において、社会の変化に目を向け、社会の変化を柔軟に受け止めていく「社会に開かれた教育課程」を提唱した。

続いて平成二十九年三月に、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」及び「社会教育法」が改正された。前者では教育委員会に対する

学校運営協議会の設置の努力義務、学校運営協議会の委員に「地域学校協働活動推進員」を加える仕組みを構築した。後者では教育委員会が「地域学校協働活動」の地域住民等と学校の連携協力体制の整備を行うことおよび「地域学校協働活動推進員」に関する規定の整備を行うこととされた。

そして令和元年度（二〇一九年度）からは、いよいよ事業として「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」を開始した。

以上、駆け足で文科省の動向を見てきたが、チーム学校では地域と学校の関係は学校が地域に対して校内の問題のある児童・生徒への支援を求める段階から、学校が校外の問題のある児童・生徒への支援を求める段階へ、さらには学校が校外の普通の児童・生徒への支援を求める段階へと至った。そして、近年では、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を併せて実現して、地域と学校のパートナーシップに基づく双方向の「連携・協働」を実現しようとしている。

2 チーム学校を超えたチーム町

——生徒と地域にとっての最適解——

奥尻高校と奥尻町の地域学校協働は文科省からの外的要請に合わせたものではなく、『地域人材育成研究』第三号の報告の①②③④にあるように、奥尻島の中で内発的で必然的に発展した協働である。

初代の俵谷俊彦校長や井上壮紀教頭は町立移管を準備する中で悩んだ末に、生徒の学びに焦点づけられたチーム学校の発想にとどまることなく、島と高校を双方向的に発展させて行くという発想にいたり、



言わばチーム町としてのまなび島プロジェクトを行うに至った。文科省が提唱する仕組み（例えば地域学校協働本部や地域学校協働支援員）を設置しないまま、あるいは県の指示で行うわけでもなく、町内の様々な関係者や町の職員となった教員の想いや工夫で町の生徒と町のニーズに応えた結果である。

おそらく、われわれがこうした奥尻高校の取り組みを賞賛すべきものとして公表すると、政府が財政的、制度的に保障せずに関係者に対して政府の身代わりを強制することを援護するけしからん意見だ、という批判が返ってくることになると思う。

そうした批判は場合によっては正しいだけに、やっかいな批判である。しかし、少なくとも場合では、高校魅力化は脱中央依存化、自立分散型化、持続可能な社会化の大きな社会変動を直視し闘う人たちの取り組みであり。安易な政府批判で、多様で、地域に根ざした内発的活性化の芽を摘むことは厳に慎まなければならない。

制度の網の目に囚われ、制度に依存しなければならない状況の中では政府を責めることが正義でありうる。政府の怠慢を指摘することには意義がありうる。しかし、奥尻町は地域の個性が明確であり、共同体の力で大災害を乗り越えた実績がある地域であり、自分の町の高校生の教育を自分たちのコントロール下に置くことに成功した地域であり、教員集団がいわゆる「よそももの・わかもの・ばかもの」の資質を十分に持つており、文科省に依存することなく町立高校として教育に責任を持つ。奥尻高校の場合は地域の力で地域の町立高校を育てて活用することが非難されなければならない理由は見当たらない。奥尻島

では文科省の指示と支援を待たないことが地域にとっても、生徒にとっても、教員にとっても最適な選択である。

なお、地方政府と中央政府のレベルでは、支援はするが指示はしないという教育動向が見て取れる。例えば島根県の高校魅力化では、県は魅力化の主幹の配置その他の人的財政的支援を行い、加えて、教員やコーディネーターの相互研修・情報交換、われわれのような研究者の受け入れによる外部視点の取り入れは行う。しかし画一的や外発的な改革の押しつけはしない。地域と高校の状況に応じた多様で内発的な活性化を支援する結果となっている。文科省も前述の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」や「地域学校協働活動」などの自主的な改革の支援を行っている。

繰り返しになるが、奥尻高校の事例は、県や文科省の資金やアイデアの提供を待たずに、地域と高校が協働して、内発的で地域の状況に合わせた、多様な高校魅力化を行っている事例である。

3 高校魅力化の魅力の感覚

奥尻高校の取り組みから、わくわく感やドキドキ感が感じられた。また、生徒は目の前にある課題に対して高校生感覚で没入していた。そして、生徒だけでなく教師や地域住民でも同じようなことが起きていた。

今日の日本の高校は魅力を欠くことが少なくない。われわれの島根県での調査結果では、島根県の高校魅力化原参加校八校の魅力化スター

トの直接のきっかけには、統廃合の危機回避であったり（隠岐島前高校）、キャリア教育の不振への対策であったり（横田高校、吉賀高校）、生徒の不適応対策であったり（飯南高校）の要素が見られた。これらの高校では一部の生徒を除いて、従来の教科書中心や受験学力中心の教育からは高校生活のわくわく感やドキドキ感、適切感、没入感が得られなくなっていた。つまり、高校生活にこのあと論するような魅力が無くなっていたのである。

魅力化を始める前の高校での勉強は将来の地位達成のための忍耐であり、やらされ仕事であり、詰め込みであった。生徒は「欲望の即時充足」は劣った欲望であると教えられ、忍耐と勤勉の彼方で味わえるかもしれない「延期された欲望の充足」こそが正しい欲望であると教えられた。

しかし中山間地域という条件不利地域においては、延期された欲望の充足を求められた生徒のうち、少なくとも割合が学校教育を介しての地位達成を断念するか、そもそも中卒時に地元を出て地位達成等の条件有利な都市部の高校へ進学した。その結果が離島・中山間地域の高校生の中退や不登校であったり、地元中学卒業生の地域外の高校への流出が目立つようになった。

わくわく感やドキドキ感、適切感、没入感とはどのような感覚だろうか。このあと、アウラとレリバンスとフローという三つの難解な概念を使うことを許していただき、教育の魅力を考えたい。魅力化以前の従来型の高校教育は、アウラ（オーラ）いまここの性質）が欠如していたり、実生活とのレリバンスを喪失していたり、フローの感覚を欠いていたりにして、高校教育に魅力を感じることが出来なかった。

アウラの欠如とはものごとからオリジナルであることやライブあることが欠如することである。アウラはヴァルター・ベンヤミンが『複製技術時代の芸術』の中で唱えた概念であり、アウラの欠如は例えるならば、過去に行われたすでに経過や結果を知っているスポーツの録画を見ている時の感覚である。あるいは、ツアーで社寺を訪問して宗教的な感覚が湧き上がることを犠牲にしても、ガイドブック通りの事物が存在することの確認を強いられる感覚である。

レリバンスの喪失とは、実生活との適切な関連の感覚（又は教材の現実生活との適切な関連）が失われることである。本稿ではアメリカの経験主義教育の教育学者デューイが『学校と社会・子どもとカリキュラム』の中で検討したレリバンスの意味で用いている。デューイによるとレリバンスの喪失は学びの動機付けを損なうものである。

フロアは没入感のことである。ハンガリー生まれでアメリカで心理学の研究を行ったチクセントミハイによると、「心理的エネルギー」が今取り組んでいる対象へ100%注がれている状態をいう。

奥尻高校では高校魅力化の取り組みの中で、高校教育にアウラやレリバンス、フロアが豊潤となり生徒はわくわく感、ドキドキ感、内発的動機付けが高まっている。また、奥尻高校以外の魅力化でも同じ傾向があり、『地域人材育成研究』第1号、第2号で取材した愛媛県の魅力化を行っている高校でもおなじことがみられた（樋田有一郎二〇二〇a）。

4 高校魅力化とは

高校魅力化は将来の地位獲得のための手段的な高校生活や学歴主義



的な高校生活（延期された欲望の充足を良しとする高校生活）ではなく、前述のようなわくわく感、ドキドキ感、適切感、没入感がある高校生活を作り出そうとしている。

また、高校魅力化の地域学校協働の定番となっている地域課題解決型学習では、生徒は上述の魅力を感じるだけでなく、有名大学入学や大会社への就職を目指すことの多い出口指導にとどまらないトータルコーディネートのカリキュラ教育をうけている（『本号』の②報告）。

高校魅力化の背景や目的については、地域人材育成研究会の蓄積の中から、次の二点を挙げておきたい。

第一に、比較的多くの高校で見られるのは募集対策である。地方では多くの高校が定員割れしており統廃合の危機に直面している。定員割れしている高校は、前述のように従来型の進学実績や部活動実績を高める競争を行うための条件が不利な場合が多く（条件不利校）、都市部の伝統校や私立校に遅れを取りがちである。条件不利という現実を受け入れずに進学実績や部活動実績を無理矢理高めようとすることは、中退や不登校など生徒の高校生活への不適応を招く結果となりがちである。従来型の募集対策の覇道を問い直して、その上で今、生徒と社会から求められる高校教育を構築していくことが募集対策の王道であり、高校魅力化の第一の目的・背景である。

第二は目的についてである日本社会と地域社会の地域人材育成の要請に応えることである。産業と社会の地方分散化・自立分散型化、地方創生、持続可能な社会の将来の担い手の育成、あるいは今現在そうした貢献をしている地域住民やし始めようとしている地域住民との双

方向的協働の若きパートナーの育成が目的となっている。なお、将来の担い手というとき、かつては、行政が工場誘致などの雇用をつくる努力をして、若い世代はそこでの就労を前提に地元に戻って来るというパターンがあった。

しかし、『地域人材育成研究』第四号で、地元住民が語っているように、これからは若者はいったんは町外に出て成長して、a. 地域に戻り住んでよそ者の視点や技能を持ち、さらに外部とのネットワークを持つ者（＝地域内よそ者）（樋田大二郎二〇一五・樋田有一郎二〇二〇b）、b. 他地域に住んだとしても、地元とのつながりを持ち知識・技能やネットワークを提供する者（関係人口）、c. Iターン者やさまよい人を受け入れ根付かせる者（よそ者使い）となること、奥尻町や日本中の離島中山間地域が望む地域人材である。

5 奥尻高校という希望

——自然な想いの発露の場——

われわれは、奥尻高校を知ること、わくわく、ドキドキする。それは奥尻高校に魅力があるからだけではない。今、日本中で高校を良くしたいとか地域を良くしたいという想いが渦巻いているからである。しかし、どんなに渦が激しく巨大なものになっても、地域と高校についての常識に囚われていると、そのエネルギーが改革の力に転換できないでいる。奥尻高校にはわれわれの常識を打ち砕く柔軟さや自由さがある。

奥尻高校の取り組みは、日本の地域と高校を変革する理想のための

取り組みではない。地域の事情や高校の事情に基づいた内発的な取り組みである。しかし、町立移管という工夫は良い意味でパンドラの箱を開けた。

子どもは地域の希望、家族の希望である。われわれはインタビュー以外の場面でも町民と話す機会があった。インタビュ対象者も町民も高校を町立移管することで、子どもが町の希望であることを再確認した。町立移管の結果、生徒や教師、町民の熱い想いやドキドキ感が解放された。われわれは、奥尻高校を見ることで、町民や保護者、そして生徒自身が高校教育に熱く関われる世界を見ることができた。

『地域人材育成研究』第3号は、奥尻高校の校長、教員、生徒の声をアークイブした。近刊の『地域人材育成研究』第4号は、奥尻町の行政、組織、卒業生の声を紹介する。

〈引用・参考文献〉

ジョン・デューイ、一九九八、市村尚久（翻訳）『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社。

長谷正人、二〇一九、「複製技術時代における思考の可能性——ベンヤミンの複製芸術論を読み直す——」『早稲田大学院文学研究科紀要』六四巻、八〇五—八二〇頁。

樋田大二郎、二〇一五、「離島・中山間地域の高校の地域人材育成と「地域内よそ者」：島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」の事例から『教育研究・青山学院大学教育学会紀要』（五九）一四九—一六一頁。

樋田有一郎、二〇二〇、a 「高校魅力化における「地域の特徴を生かした教育」のあり方を考える——学習目標と学習効果の整合性に着目して——」『早稲田大学院教育研究科紀要別冊』（二七—二）五一—六三頁。

樋田有一郎、二〇二〇、b 「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性——島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して——」『村落社会研究ジャーナル』二六（二）一一—二二頁。

文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」【地域魅力化型】大橋隆広、二〇一七、「チーム学校」論の系譜…一九九〇年代以降の学校論を中心にして『広島女学院大学人間生活学部紀』第四号八一—八六頁。

『地域人材育成研究』第3号の著作権の全ては地域人材育成研究会に帰属します。ただし、出典を記載してあれば、本誌の一部または全部を印刷物か電子データかの形式を問わず、複製や改変や再配布することができます。本誌をみなさんでご利用いただけましたら幸いです。

ただし写真に関しては、写真を抜き出して複製や改変して利用する場合には、北海道奥尻高等学校と奥尻町、奥尻町観光協会の許可を得ることを条件といたします。本誌に使用されている写真は、奥尻高校及び奥尻町、奥尻町観光協会から提供を受け、本誌での使用の許可を得ています。

著作権ポリシー

〈編集後記〉

『地域人材育成研究』第3号、第4号は奥尻高校を特集しました。第3号が特集の前半で、近刊の第4号が後半になります。

『地域人材育成研究』の第一の使命は高校の現場で起きていることを生徒や保護者、高校関係者、地元のみなさんに知ってもらうことです。第二の使命は行政の担当者や研究者に自分たちが対象として行っていることを行っていることの意味を伝えることです。

高校魅力化をはじめとした地域人材育成にかかわる高校教育改革は、直観的には良い方向に勢いよく進んでいるように見えます。応援したい気持ちでいっぱいです。しかし、無批判に賛辞を送ることは躊躇します。方法や手順の妥当性を欠く実践は、道を踏み外したりぶれたりするからです。

われわれ地域人材育成研究会は、アカデミックな仕組みを活用することで、日本の高校の位置を知る地図と進む方向を考えるための磁石を作ることを目的としています。

『地域人材育成研究』第3号編集担当

樋田有一郎

3

地域人材育成研究

第3号

二〇二〇年七月三十一日発行

特集…各地の高校魅力化プロジェクトを紹介
奥尻高等学校の町立移管と

高校魅力化(上)

デザイン…金子あかね・金子純一

編集・発行…地域人材育成研究会

Print ISSN 2435-3604

Online ISSN 2435-3612

ISBN978-4-910384-03-0 C3037

本誌の全文の電子ファイルは次の地域人材育成研究会ウェブサイトで開催しています。

<https://rhrd.net/>



高校魅力化プロジェクトとは

その地域・学校でなければ学べない独自カリキュラム、学力・進学保証をする公営塾の設置、教育寮を通じた全人教育の三本柱で、多くの生徒が行きたい、保護者が通わせたい、魅力ある高校にするプロジェクトです。

グローバルとローカルを結ぶグローバル人材の育成、答えが一つに定まらない時代に、決断を答えにする、21世紀スキルを持った人材を育成します。

<http://c-platform.or.jp/>

<https://miriyokuka.com/>

ISBN978-4-910384-03-0

C3037



地域人材育成研究

Regional Human Resource Development Studies

編集・発行：地域人材育成研究会

Edited by The Forum on Regional Human Resource Development

3

地域人材育成研究会ウェブサイト

<https://rhrd.net/>